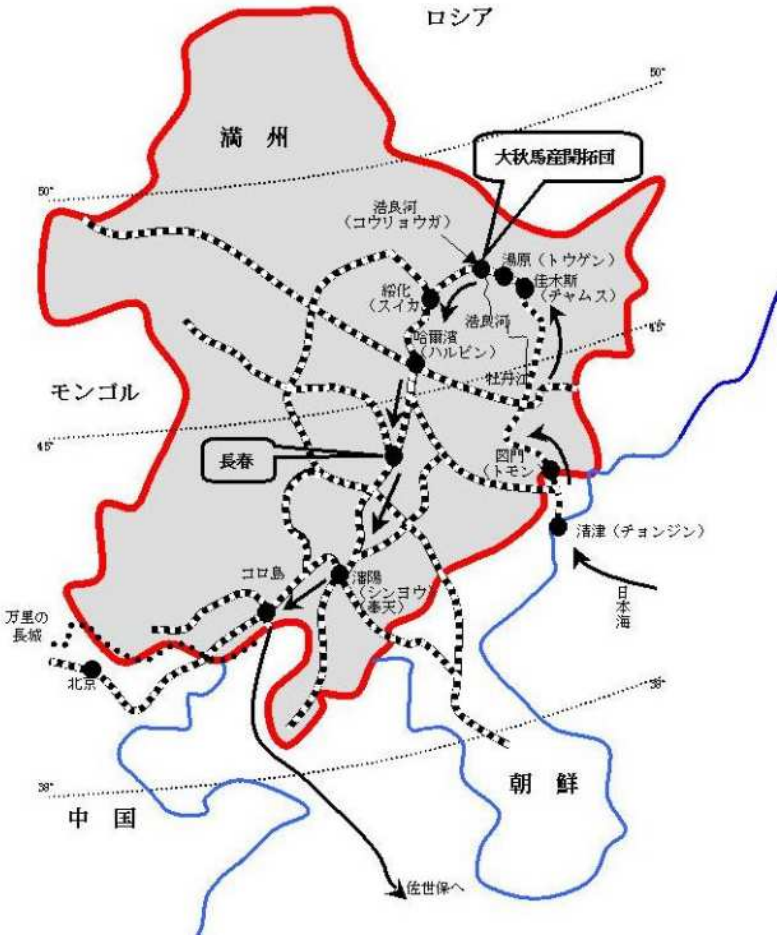
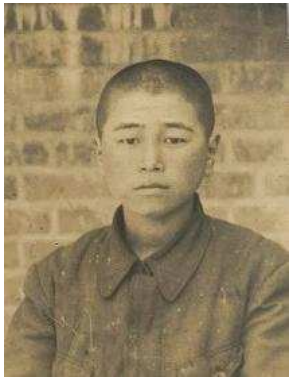
苦難に耐えて

―少年の見た満州開拓団―

長谷田　眞一　著

満州全土


ロシア
満　州
大秋馬産開拓団
浩良河
（コウリョウガ）
湯原（トウゲン）
佳木斯
（チャムス）
綏化
（スイカ）
浩良河
哈爾濱
（ハルビン）
牡丹江
モンゴル
長春
図門
（トモン）
清津（チョンジン）
コロ島
瀋陽
（シンヨウ）
奉天）
日本海
万里の
長城
北京
朝　鮮
中　国
佐世保へ



著者　長谷田眞一
（昭和21年2月長春にて）

兄　故長谷田忠夫
（昭和21年2月長春にて）

伯父　故米澤源作
（羽幌町築別にて）

羽幌の街並み

羽幌町築別炭鉱の冬景色

羽幌町築別炭鉱の夏祭り

羽幌の町並み（羽幌一丁目付近）

「絵葉書の世界」http://white.freespace.jp/layla/ より

はじめに

私は太平洋戦争末期から引揚まで一年四ヶ月、満州（中国東北部）に住んでいた。戦中は平穏だったが、ソビエト軍侵攻後は苦労の連続だった。中国語で、「苦難（クウンナン）」といえば、苦しみ、苦痛という意味である。広辞苑には「くるしみ、難儀、苦痛」とある。偶々日中同義語であることに着目し、突然襲いかかった在満の人々の苦しみや悲しみのこもる言葉としては、尚不充分ながら、表題に苦難の二文字を使わせて頂いた。

「飛んで火にいる夏の虫」という喩えがある。たった一人の兄と行動を共にするために満州という火の中に飛び込んでしまった。僅か十三歳の時のことである。戦後六十数年経った今、ふと潜り抜けて来た過去を振り返ってみるとき深い因縁に気付かされる。

今まで折にふれ周囲の人達に語って来た数々の体験を書き留めて、心ある方々にもお伝えし、何かのお役に立てて下されば思い立ち筆を執った。大人の目から見れば幼稚な体験ではあるが、少年の立場から見た時代の一断面としてご一読頂ければ幸いである。

資料もなく、ほとんど記憶のみに拠ったので思い違いしている部分も多々あるかと思う。誤っている個所があれば、ご教示頂きたい。

無謀な国策に操られ、儚なくも満州の土となられた同胞達のご冥福を祈りつつ戦争のない時代が何時までも続くよう願って已まない。

平成二十一年　早春

著者　長谷田　眞一

第一章　戦中編　6

一．満州へ夢を託して　7
二．私を困らせた牛馬たち　8
三．出発　9
四．家族の一員として　10
五．満蒙開拓館　11
六．北朝鮮を目指して　12
七．国境越え　13
八．車中にて　13
九．目的地に着く　14
十．開拓村　15
（一）日常生活　15
（二）自然環境　19

（三）　豆腐屋　19
（四）　伯父、兄と牛馬到着　20
（五）　現地人との交流　21
（六）　蕗採り　22
（七）　中国人のお葬式　22
（八）　盗難に遇う　23
（九）　大河に遊ぶ　24

第二章　戦後編　26

一．　ソ連侵攻始まる　27
二．　八月十日　27
三．　避難始める　29
四．　雨中の逃避行　30
五．　兄との再会、綏化（すいか）市にて　32

六.　終戦　32
七.掠奪（りゃくだつ）　にあう　33
八.　長春に着く　35
九.　日々の生活　35
十.　メータン・ショートル（石炭泥棒）　38
十一.　小間使いに雇われる　39
十二.　伯父の死　41
十三.　ソ連兵の進駐　42
十四.　八露軍　44
十五.　善ちゃんの死　45
十六.　ソ連兵と米粥　45
十七.　兄を失う　46
十八.　茶毘の煙　48
十九.　兄と食べたうぐいす餅　49

二十.　発疹チフスに罹る　50
二十一.　勇気をもらう　51
二十二.　引揚開始　54
二十三.　引揚列車　55
二十四.　引揚船（名優丸）　56
二十五.　船中にて(続)　57
二十六.　故郷に向って　59
二十七.　解散　60

第三章　追想　62

一.　墓参　63
二.　長春今昔　69
三.　関東軍と匪賊(ひぞく)　70

四・　本間団長に想う　74
五・　馬たちよ　75

第一章　戦中編

一．　満州へ夢を託して

昭和十九年の夏の頃、北海道北部の羽幌町築別炭鉱にも、増産、増産の声が満ち溢れていた。私の年齢は十三歳で、高等小学校に通っていた。そして五歳年上の兄の忠夫は炭鉱で馬引きの仕事をしていた。両親は已に他界していたので、兄と共に母方の伯父（米澤源作）の家（羽幌町築別炭鉱）でお世話になっていた。

平穏無事な生活の中で、伯父は満州開拓団への参加に意欲を燃やしていた。開拓団と言っても農耕に従事するのではなく、軍馬増産を目的とする「馬産開拓団」と称するもの。伯父の家族は全員この計画に反対だった。困った伯父は私の兄に馬の世話係として誘い話を持ち掛けたらしい。兄も多少は野心的なところがあってか同意をしたようだった。

開拓団を企画したのは大東亜省で、斡旋の窓口は北海道庁だった。昭和十九年春、既に第一陣（先遣隊）を満州に送り出しており、更に第二陣（昭和二十年）、第三陣（昭和二十一年）まで予定されていたという。

伯父も当初第一陣に加わる予定だったらしいが、牛馬の買付が進まず、第二陣（本隊）（昭和二十年）の参加となってしまった。

伯父の妻（トキエ）は反対ながら、しぶしぶ翌昭和二十一年になったら考えるということになったが、私は新天地が拓けるかも知れないという期待感と、兄と行動を共にしたいという一念で満州行きに躊躇はなかった。

太平洋戦争は南方の島々の玉砕、本土各地の空襲など日本の劣勢は目に見えていたが、誰一人敗戦など口にするものはいなかった。

今にして思えば、こんな時世にさえ伯父の心を強く満州の地に駆り立てたものは伯父の弟達が満州で成功し、羽振りの良さを見せつけていたからではないかと思えてならない。

万一日本が戦争に負けるようなことになれば、異国にいる日本人の立場はどうなるのかを考えなかったのだろうか。在満の日本人達の中には戦局の悪化に伴い家族を日本に帰したという話を聞くにつけ、口惜しい気がする。

二. 私を困らせた牛馬たち

開拓団に参加する牛馬は、近隣の町村で、買いつけたものだった。貨車の手配が整うまで、約二十キロ離れた市街地に住む伯父の知人（町議・高木辰造氏）のきゅう舎に預けてあった。満州へ出発する数日前、私は伯父に連れられて、汽車でその知人宅へ向った。牛、馬合わせて八頭（牛三、馬五）を自宅（築別炭鉱）まで徒歩で連れて来るのを手伝う為である。四月初旬と言っても羽幌地方には未だ残雪があった。

知人宅を発ったのは午後五時頃だったと思う。田舎の一本道、牛、馬を先頭にして最後尾に伯父と私が付いた。途中で日暮れとなり、月が雪の原野を照らしていた。自宅まであと四キロ位のところで伯父は「知人宅に寄って来るので牛馬を追って、このまま先に行っててくれ。」と言うのである。私は生来牛馬の扱いを好む性格ではなかったが、仕方なく引き受けた。

月夜の雪道を牛馬と共に歩いているところへ、静寂を破るかのように、汽車の音が近づいて来た。午後九時過ぎの終列車が道のすぐそばを轟音と共に通過した。聴力が利く牛馬は突然襲ってきた音に驚き、向きを替えて散らばって逃げだした。子供の私には手の付けようがなかった。私はここで、牛馬の管理を殆ど放棄していた。

幸いにも近くに一軒の農家があった。ここの主人が出て来たので事の次第を話すと「とにかく、我が家に入って伯父の来るのを待て。」と親切に言って下さった。「夕食が未だだろうから餅でも食べなさい・・・。」と餅を焼いて下さった。私は半分ベソを掻きながら餅をご馳走になっていると、伯父がやって来た。「雪道の途中で牛馬の足跡が途切れているので戻って来てみるとお宅の前に牛馬がいるので・・・。」と言う。牛馬は農家の庭に群がっていた。伯父は主人へ丁重に礼を述べて牛馬の群れを一列に整え自宅へと歩かせ始めた。自宅に着いたのは夜中の十二時頃だった。伯父の寄り道癖(へき)は今後も私を困らせることになる。

三. 出発

昭和二十年四月初旬、いよいよ出発の日が来た。

牛馬合わせて七～八頭を運ぶ為に有蓋貨車が四輌ほど用意されていた。貨車中央部の両側の鉄の引戸を開放し、牛馬の鼻面を向き合わせて乗せてあった。私と兄は馬の顔の直下に陣取って寝食を共にすることになった。

伯父の同僚の木下さんが国鉄築別駅まで送って下さった。大人の木下さんの目には少年の私

が遠く満州に旅立つ姿を見て可哀想に思ったらしい。（引揚後、トキエ伯母から聞いた。）

途中、深川駅で、車掌から約二時間の待ち時間があることを告げられたので、伯父は知人に逢ってくると言って出駈けた。約一時間後、発車時間は変更になり、伯父はこの駅に取り残されたが、後続の列車で後を追って来て間もなく、私達の貨車に辿り着いた。

時刻表が無いにも等しい貨物列車だが、翌朝小樽の手宮駅に着いた。ホームの向かい側の崖に「古代文字」と表示して金網で囲ったものがあったのを思い出す。

宿泊所として手配済みの民家宮田家（梅ケ枝町）に行った。一緒に渡満する松浦さんが既に投宿しておられた。牛馬は小樽港から貨物船で、そして家族は新潟港から客船で、夫々渡満する手筈になっていた。数日宮田家にお世話になったが、私は伯父の家族の一員として函館に集結することになった。早朝、伯父に連れられて小樽駅に向かった。

四．　家族の一員として

小樽駅の待合室で伯父から一人の中年婦人を紹介された。伯父は私に、「この人と一緒に、満州へ一足先に行っててくれ。」と言う。伯父と兄は、牛馬を連れて小樽港から貨物船で後から追いかけて来るというのだ。私は、突然のことで驚くと同時に、これからの長旅を考えるとホッとする一面もあった。伯父は、トキエ伯母が満州行きに同意しなかったので、思案の末、賄い役として、この婦人（Tさん）にお願いしたようだ。

夕方函館に着くと、すぐ指定された宿に向かった。部屋には既に旭川から来たという近藤さ

ん家族四人が入室しておられた。同行の好(よし)みで会話も弾んだ。午前零時頃の青函連絡船に乗船するため、待合室に行くと北海道各地から集まって来た満州開拓団家族の人達で混雑していた。幸い船酔いもせず翌朝青森港に着いた。

初めて見る裏日本の景色に癒されながら、新潟駅に着いた時はすっかり陽は落ちていた。全員点呼の後、月明かりの中を当夜の宿へと急いだ。

五.　　満蒙開拓館

歩いて十四、五分、信濃川の辺りに、木造二階建ての宿泊施設があった。玄関には「満蒙開拓館」とあり、如何にもこれから満蒙の地を目指す人々に勇気を与えてくれるような名前に思えた。今までどれだけ多くの移民達がここに宿を借りて、遠く満蒙の地に夢を馳せたことか、想像に難くない。北朝鮮清津港行きの船の準備が整うまで、数日ここに留まるのだという。食事は大豆入りの七分搗きのご飯に、昆布の佃煮が多かった。蛸壺形の防空壕を掘ったり、市街地を散策したりして時間を費やしていたが、数日後の午後、空襲警報のサイレンが鳴り響いた。B２９襲来を覚悟して上空に目をやると、既に白い飛行機雲が一つ北に向ってゆっくりと移動していた。偵察機らしいが、それにしても警報の遅さにはがっかりした。

また、翌々日の夜中、飛行機の音だけは盛んに聞こえるのだが、爆弾の音などは聞こえてこない。外はなんとなく緊張感が漂っていた。Tさんが「空襲だってさ。」と低い声で教えてくれた。同室には他に寝ている人々もいたが、誰も気付かなかったようだ。「あの部屋の人達は、

命が惜しくないのだろうか！」とは防空壕に逃げ込んだ人達の弁だったとか・・・。

六・　北朝鮮を目指して

四月中旬、愈々日本を離れる日が来た。信濃川沿いの道を埠頭に向って歩いた。北朝鮮行きの客船「白山丸」が接岸しており、すぐ乗船となった。出航のドラが鳴ったのは午後四時頃ではなかったかと思う。これから二昼夜の船旅だが、心配なのは米軍機や魚雷攻撃に遭遇することだ。暫くして佐渡沖を通過したが、夕陽に映える島影が私達を見送ってくれているようだった。幸い波は穏やかだったし、米軍からの攻撃もなかった。

白山丸
(出典：毎日新聞社)

二日目の午後、ようやく朝鮮半島が見えてきた。夕陽を浴びた黄色い山肌の見え隠れする海岸線を眺めながら清津港に入ったのは、もう夕暮れ時だった。すぐ下船したが、船旅が長かったせいか、体のふらつきがなかなか収まらなかった。簡単な入国審査の後、急いで鉄道の駅へ移動した。いかにも貧しげな駅舎だった。

私は見なかったが聞いた話では、現地の朝鮮人の女性達が、日本人の旅行者目当てに、手製の飴を売りに来たところ、巡回中の日本人警官に見つかった。警官は飴をお盆ごと取り上げ、路上に放り投げたそうだ。旅行者に

不衛生な食べ物を売らないよう配慮してくれたのかも知れないが、一寸行き過ぎではないか、とそれを目にした同僚の人と語り合った。植民地での日本の警官の横暴振りを見せ付けられた最初の出来事であった。

七．　国境越え

北朝鮮に着いた時の入国審査は屋舎を通過するだけであったが、清津駅を発って間もなく満州との国境の街、図門（とも）に着くと、再び入国審査だと言う。審査室のテーブルの上に手荷物を置かされ、私達を壁側に立たせて、係官らしき人物が手荷物の側を通り過ぎるだけの簡単なものだった。対象が日本人と言うこともあってか、いかにも形式的という感じがした。

一通りの手続きを終え、いよいよ満州の地に第一歩を踏み入れた。夜中、牡丹江（ぼたんこう）駅を通過する際、構内を照らす電灯の光が一際（ひときわ）明るかったのを思い出す。うとうとしているうちに朝を迎えた。佳木斯（ちゃむす）の少し手前だっただろうか、車内で一人の男性がこれからのスケジュールを説明し始めた。話し振りで、開拓団本部から遣わされて来た人だということがすぐに分った。

八．　車中にて

佳木斯の少し手前の駅から一人の兵隊が乗ってきて、私の前の座席に座り、下着のボタン付

けを始めた。隣にいた近藤さんが奥さんに手伝うように促すと、その兵隊は「大丈夫です。慣れていますから・・・・。」と固辞された。私は、兵隊達の私生活の一面を垣間見た気がした。

佳木斯駅だったと思うが、数人の中国人達が私達の車輛に入って来た。しかし、ガイド役が「ブシン、ブシン！」（駄目駄目！）と両手を広げて制止した。中国人達は不満顔で出て行った。初めて聞いた中国語だったのでみんな大いに興味を示した。

間もなく有名な、松花江（しょうかこう）を渡ったが茶色い濁流がゆったりと流れているのを見て、満州に来た思いを一層強くした。そして外の景色も心なしか寂しくなってきた。一時間あまりで目的地に着くと聞いて一同、胸を弾ませた。

九．　目的地に着く

混乱の日本を捨てて、いよいよ目的地の駅に着いた。浩良河（こうりょうが）と言う名の田舎駅で、周辺には数軒の中国人の民家があるだけだった。前年度入植した開拓団の人達が迎えに来て下さった。私達が列車から降り切らないうちから、物売りの中国人女性達が集まって来た。丁度溶き卵を薄焼きにして、平らたく折りたたんだような姿形の食べ物であった。これをお盆に山盛りにして脇に抱えて立っている。見るからに美味しそうだったが、誰も相手にはしなかったようだ。これは卵焼きではなく、トウモロコシの粉を水で溶いて、鉄板上に薄く延ばして焼いたものらしい。満州では焼餅「ジャンピン」といって、極く一般的な食べ物だ。駅舎の向かい側には小高い丘があり、頂上には一本の墓標らしきものが建っていた。一見して日本兵のものではない

かと思われたが、確認する機会はなかった。

駅前の道を右折して五～六分歩くと茶色い濁流が流れる大河に差し掛かった。浩良河である。私達は今乗って来た列車の前方に架かる鉄橋を利用してこの大河を渡ることになった。線路の中央部に板が敷かれてあり、歩き易くなっていた。私はリュックサックを背負い、ブリキ製の水筒を脇にして渡った。線路伝いに二十分ほど歩いて、いよいよ最終目的地の開拓村に到着した。

十・　開拓村

（一）　日常生活

低い土塀に囲まれたサッカー場ぐらいの広さの中国人集落があった。これから私達十数家族がここの一角を借り受けて住むのだと言う。満州国三江省湯原県向陽村と言い、大秋馬産開拓団と称した。昨年度入植者と今年入植する私達を合わせると、人数はおよそ一〇〇名ぐらいだったと思う。

土塀の高さはニメートル程度。四ヶ所に扉のない出入り口が設けられていた。中央に太いメインロードがあり、裏側に夫々一本ずつ平行に計三本の道が走る構造である。道に沿って泥壁の家が数十軒整然と建っていた。中国人の極く一般的な集落の形式なのだろうか（集落については後述）、私達はいわば中国人からの借上げ住宅として塀内の一角を割当てられてあった。

前年度入植者は集落から数十メートル離れた場所に木造新築の長屋に引っ越していた。来年には私達も木造の新築住居が与えられるとのことだった。

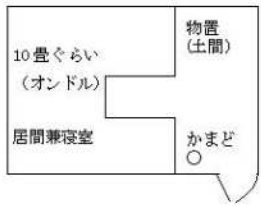
とりあえず伯父に与えられた住居は昔の貧しい農家の納屋のようだった。名ばかりの玄関の板戸を潜って、直ぐ炊事場、奥には一室だけ居間兼寝室があるだけである。通路は土間、居間の床はオンドル式なので土壁になっており、表面にはトウモロコシの幹の表皮で編んだアンペラと称する敷物を敷く。冬期は炊事した煙が床下を通るので暖かいのだと言う。中国人の知恵だろうが現在の日本で言うところの床暖房の先駆けである。東西の壁には一箇所ずつガラス窓があるだけで、採光は良くなかった。電気、ガス、水道、そしてトイレもなく、明かりはランプ、炊事はオンドル式のかまど、水は近くを流れる小川から汲み置きし、沸かして飲んだ。トイレは高床式の共同トイレで日本人用に特設したものらしい。風呂は記憶にないが、私は子供だったから水浴びで何とか間に合った。一挙に明治時代の北海道開拓民に

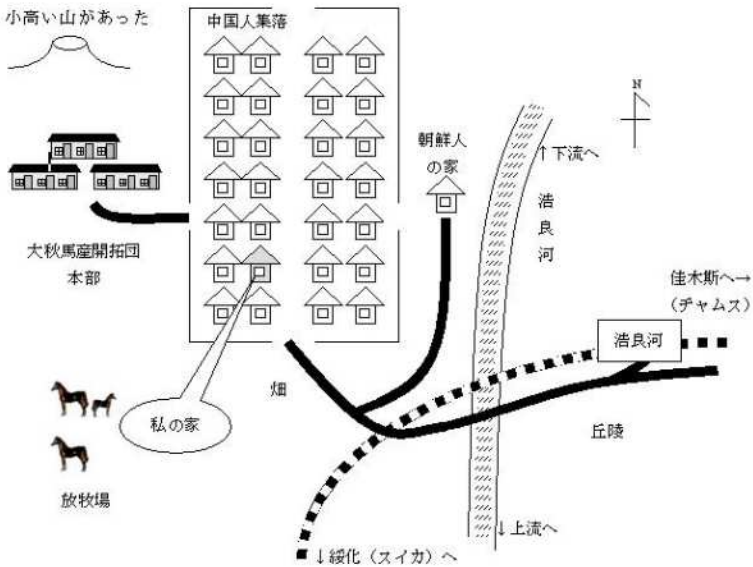
満州の中国人家屋

私が住んでいた家もこのような感じだった。

戻ったような生活を強いられた。
然し、日本本土のような緊張した雰囲気は殆どなく、のんびりした生活を送れそうな感じだった。大人達は大志を抱いて来たので少しぐらいの不自由さは我慢できたのだろう。

土壁の我家


物置
(土間)
10畳ぐらい
(オンドル)
居間兼寝室
かまど
○


小高い山があった
中国人集落
朝鮮人
の家
↑下流へ
浩
良
河
大秋馬産開拓団
本部
佳木斯へ→
(チャムス)
浩良河
畑
私の家
丘陵
放牧場
↓上流へ
↓綏化（スイカ）へ

（二） 自然環境

集落の土塀の外には田畑があり、日本人は中国人から借り受けて耕作をしていたようだ。水溜りには中国人が飼っている猪のような鼻を持った黒豚が十数頭の子豚を連れて泥だらけになりながら走り回っていた。いわゆる、中国独特の田園風景といった感じである。

田畑の向こうには広々とした草原があり、牛馬の放牧には最適地と見えた。牧草地を囲むように低い山並みが遠望され、天然の放牧場と言っても過言ではないと思えた、しかし、夜間には狼が出没し、子牛を喰い殺すという事件も数回あった。開拓団本部の裏手には標高百メートル位の富士山のミニチュアを思わせるような形のよい山があり傾斜は結構きつかった。前屈みになりながら、息を切らして登ってみた。スズランやチャボゆりが群生していて、さながら原生花園を思わせた。時期を変えれば他の草花にも出逢えただろうがその機会に恵まれることは遂になかった。中国人集落には日本語に堪能な村長がいた。中年の温和な人物で、私達開拓団員とは非常に友好的に接してくれた。

（三） 豆腐屋

到着の日、豆腐の味噌汁を作ることになり、先輩の団員に中国語を教えて貰った。豆腐は中国語でも「トーフ」だと聞いたので、友人と二人で豆腐屋を探しながら行ってみると一人の老

人が作業場にいた。私は、不安ながら「トーフ」と言って入れ物を差し出した。老人はすぐ理解して売ってくれた。豆腐が買えたことも、そして、初めて使った中国語が通じたことも嬉しかった。幾ら払ったかは覚えていないが、味噌汁の豆腐は焦げ臭い味だった事だけは強く印象に残っている。後日何度か食べたが、焦げ臭い味は変らなかった。きっと、永年使っている釜に染み付いた臭味が抜け切っていなかったのだろう。

豆腐屋の近くに清流があり、よくそこへ飲み水を汲みに行った。急流で膝ほどの深さなので、夏の暑い日には川に入って水汲みをした。食事はご飯と野菜中心の料理だったと思う。肉や魚はあまり食べた記憶がない。

（四） 伯父、兄と牛馬到着

私達家族が到着して数日後、伯父がひょっこり現れた。北朝鮮の港に牛馬を陸揚げしてしまえば、後は数人の若者達に飼育係を任せればよいということになり、年輩者達は一足先に家族のもとへ向かったとのことである。その後、数日して兄と牛馬も無事開拓村に到着し、一家四人が揃ったのは四月下旬の頃だった。故郷を発って約一か月、人と牛馬は揃ったが、家具・家財は待てど暮らせど届く気配はない。戦争末期の混乱で何処へ消えてしまったものか行方不明になった。荷物の中に入っていたもののうち一つだけ未だに忘れ得ないものがある。亡父（幸次郎）が遺した「忠夫、眞一に告ぐ」で始まる巻物の遺書である。二人の男児を残して逝く父親の心情を切々と墨書したものである。私にとっては代え難い宝物であったのに荷物の中に入

れてしまったことは悔やんでも悔やみきれない。

（五）　現地人との交流

伯父は社交性に長けていたから、中国人達ともすぐ仲良しになった。ある日の夕方、中国人が主食としている「ポーミー・マントウ（トウモロコシの粉を水で捏ねてコッペパン状にし、中に塩で味付けした野菜を詰め込んで蒸した饅頭）」を数個貰って来た。米を食べている日本人から見れば、かなり貧しい食事だったが、蒸したてだったせいか結構いけると言って食べた。

集落から歩いて十四、五分のところに朝鮮族の一家があり稲作を生業としていた。ここの主人は日本語を上手に話すせいか伯父とはすぐに仲良しになった。朝鮮族の人達は飴作りの上手な民族である。伯父はこの飴に目を付け、この一家から飴を仕入れて、開拓団の子供達に売ることを考えた。水飴を固目に仕上げ、小判型にして、きな粉をまぶしたものである。一度に三十個ほど仕入れるのだが、甘い物が不足していた時代だったから、開拓団の子供達の口こみもあり、大好評ですぐに売り切れた。私も売り子をしながら味見をさせて貰ったが飴のほどよい甘さときな粉の風味がマッチしてとても美味しかった。砂糖が手に入らない時代だったから子供達が喜ぶのも分かるような気がした。伯父は飴売りによる利益などは考えていないようだった。

（六）　蕗採り

蕗などは何処にでも生えているように思っていたが、いざ採ろうと思うと、中々見当たらない。ましてや、初めての土地なので誰かに教えてもらうのが一番と言うことになり、本部の先輩に案内して貰うことになった。先輩達二人は早朝一足先に出発し、初めての私達四人は現地で落合う約束だった。丘陵の裾に表土がまばらに残る道らしからぬ道をハイキング気分で進んだが、中々先輩達の姿を探し出すことが出来ない。心細くなっていた時、右手前方に一軒の中国人（朝鮮族かも知れない）の民家を発見した。同僚の一人が代表して蕗の生地を尋ねることにした。私達は遠くから中国人との会話を見守っていたが、間もなく帰って来て曰く、日本語が全く通じないので、身振り手振りを駆使したが結局、埒があかなかったと言う。仕方なくもう少し進んでみようと歩き出した途端、柳など低木の繁みの方から微かに人声が聞こえた。「おーい！」と呼びかけたら、「ここだー！」の答えが返ってきた。先輩達に逢えたことと、待望の“蕗サン”に逢えたことで私達の喜びは最高潮に達した。雨傘にするような立派な蕗ではなかったが、中太の手頃なものが採れた。各自数十本ずつ採って、探検家気取りで家路についた。約半日の行程だったが、楽しい思い出となった。

（七）　中国人のお葬式

集落の中国人の家に死者が出て葬式の準備中と聞いたので俄然興味が湧いて来た。友人と二人で死者の家の玄関から中を覗くと、奥の部屋の壁側に黒い服を着せられた女性らしい遺体が

仰向けに寝かされていた。外では二人の大工が一心にぶ厚い板に鉋(かんな)を押しつけて棺を造っていた。そこへ黒地のゆったりした着衣の中年女性二人が泣きながら、玄関の入り口に入るや否や大泣きして遺体に取りすがった。両膝をつき、上半身をゆすりながら「何故死んでしまったのだ！」と言わんばかりの言葉を発して泣きじゃくった。遺族達数人も遺体の側で悲しげに見守っているばかりだった。この儀式は五～六分で終わり泣人(なきと)達は煙草を吸って気を落ち着かせている様子だったが、間もなく帰って行った。泣人という職業があるということを聞いたことはあったが、実際に目にしたのはこれが初めてであった。中国人は死者に対する惜別の念をこのような形で、表わすのだろうか、残念ながら葬送の儀式は、見逃したが、笛やドラのようなもので墓地まで送るらしい。棺は塗料で美しく文様塗りし、親よりも先に死んだ場合は墓地に棺のまま野晒にして置き、後年親が死亡した時に埋葬するのだとか・・・。翌年、新京（現長春）の墓地で野晒しになった棺が整然と並んでいる光景を目にしたことがある。どうやら本当らしい。

（八）　盗難に遇う

渡満して一か月、日常生活もようやく慣れてきたある朝のこと身支度しようとズボンに手をやるが見当たらない。そのうち伯父も兄も同じことを言い出したので、盗難に遇ったことに気付いた。犯人は日本人なのか中国人なのか皆目見当がつかなかった。玄関といっても枠もない簡単な板戸だったし、戸締りは紐一本で縛っておくような簡易なものだったから容易に侵入出

来たのだろう。全く予想外の出来事だった。中国では盗人に気付いても、その場では黙ってやり過ごし、後で犯人の家からこっそり取り返してくる習慣があると聞いた。“郷に入っては郷に従え”とは言うものの、盗難に気付かずに寝入っていたのだから取り返す術がない。代わりのズボンで何とか凌いだが、郷里の馬具店で新調した本皮のベルトまで持って行かれたのだから口惜しくてならない。

（九） 大河に遊ぶ

北満とは言え、真夏の暑さは結構厳しかった。子供達にとって水浴びする所と言えば近くを流れる浩良河しかない。「河」と言うぐらいだから濁流渦巻く大河である。数人の友人と連れだって、流れの緩やかな入江を選んで泳ぐことにした。日本では濁流で泳ぐことはあり得ないことだから一寸心配だったが、現場に着くとすでに中国人の子供達が泳いでいたので不安は和らいだ。私達の姿を見ると中国人の子供達は一斉に川から上がって帰り始めた。日本人の子供達に場所を譲ったのだろうか。

初めて入る濁水の中に恐る恐る足を入れたが、川底が見えないので水深がつかめない。その点ではとても不気味で危険極まりない。しかも川幅が五~六十メートルもあり、中央部の流れも速い。きっと友人達と一緒でなければ、濁水に足を浸けることさえしなかっただろう。危険を感じながら水泳はそこそこにして切り上げた。帰ろうとすると一人の中国人の老人の姿が目に留まった。彼は一本の釣竿に糸を垂れて、じっと座っていた。そこは放牧場の湿地帯から湧水

が集まって流れ出る小川の河口だった。芦が生え、浩良河に棲む魚たちの絶好の産卵場所のように見えた。私達は老人に近づき魚籠(びく)の中を覗きこんだが、釣り始めたばかりらしく、釣果はなかった。後日私達も釣りを楽しもうと思い、どんな魚が釣れるのか知りたかったが、中国語が分からないので諦めざるを得なかった。老人は足下に乾燥させた蓬(よもぎ)の葉の縄に火をつけて燻し、虫を除けていた。この火縄にはみんな関心を示した。水浴びに来て中国人から学ぶことの多い一日であった。

第二章　戦後編

一．　ソ連侵攻始まる

開拓団本部と外部との情報交換はどのようになされていたのか分らないが、各家庭では新聞もラジオも無い生活だったから、日本本土の状況など殆ど知らされていなかった。沖縄の戦況や、広島、長崎の原爆投下も子供達の耳にまでは達していなかった。

八月九日未明からソ連軍が北満に侵攻して来たことなど知る由もなかった。当日も開拓村には平和な時間が流れていた。正午過ぎ、いつもは滅多に飛ぶことのない飛行機が一機、南から北へと飛んで行った。確か日の丸は付いていないなとは思ったが、不審に思うこともなく、その日は無事に暮れた。

二．　八月十日

翌八月十日早朝、「ソ連軍北満へ侵攻中」との情報が入り、二十歳から四十歳までの男子は直ぐに佳木斯の連隊に集合せよとの通知があったようだ。兄はあと数ヶ月で二十歳になるので、一応行ってみようということになり、同僚の人々数十人と共に出掛けて行ってしまった。混乱の中で、どんな別れの言葉を交わして見送ったかはっきりは覚えていない。

後に残された老人と婦女子達は本間団長を先頭に明日（八月十一日）夕刻までにはこの村の生活を捨てて汽車で、南部へ避難するのだという。この決定は当時、佳木斯高女にいた本間団

長の三女（小野澄子さん）が学校からソ連侵攻を聞かされて、すぐ両親のもとへ帰るように促され、列車での帰途偶々、浩良河駅で駅長から団長に対する避難命令書を託されて持参したことによると後日聞いた。避難命令の発信元はよく分からないが、開拓団の戦後はここから始まると言っても過言ではないだろう。

私は一時的にここを離れ、また戻ってくるものと思っていたが、Tさんから、この地も財産もすべて放棄するのだと聞き、これはただ事ではないと思った。故郷の財産の殆どを牛馬の購入に充ててここまでやって来たのに、その動物達を置き去りにして逃げざるを得ないと言う大人達の心境こそ察して余りある。今まで耕作してきた畑の柵を取り払いトウモロコシや南瓜を牛馬の欲するままに食べさせた。本当は一気に食べさせると腹を壊すと言われ、与えないのだが、そんな事より牛馬との別れの辛さの方が先に立つと言ってみんな泣いていた。一夜にして一八〇度の転換を余儀なくされた開拓団員の口惜しさは喩えようもなかったのである。

心の中では泣きながら当座の寝具・衣類・食料を背負えるように取りまとめ、残った家具家財は焼き払うことになった。夕闇迫る頃には各家の前庭で焚き火が始まった。見物好きの中国人達が焚き火の周囲に立って珍しげに眺めていた。我が家では、家具・家財は未だ到着していなかったから、燃やすほどの物は無かったが、隣家の高橋さん宅では廃棄するものがたくさんあった。燃え盛る炎の中に、茶箪笥が投げ込まれた時、見物していた中国人達は「アイヤー！アイヤー！」と驚きの声を上げた。残して中国人達に持ち去られるよりも・・・。という気持ちがありありと読めた。今夜中国人たちが暴動を起こすかもしれないという心配が大人達の脳裡にあった。隣の高橋さん宅のお爺さんが焚き火の側に腰を下ろし、軍刀を腰に差し刃身をち

らつかせながら、並みいる中国人達に「ジャングイ、スーラ、スーラ！」（親分さん、来たら殺すぞ！）と言いながら威嚇して見せた。

幸い中国人達の暴動は起こらなかった。本間団長と中国人村長との話し合いが功を奏したのかも知れない。後日、伯父からの打ち明け話だが、避難する数ヶ月前ホルスタインの子牛一頭を隣駅（涼台）の中国人駅長に売却していたと聞かされたが、生活費を得るための苦肉の策だったようだ。避難の為に全ての牛馬を放棄してしまったのだから伯父の行為を褒めてやりたいぐらいに思った。

三．　避難始める

八月十一日午後、食料と寝具類を背負い駅まで約ニキロの道程を線路伝いに歩いた。浩良河駅に集結したのは午後四時過ぎだった。機関車には軍服姿の機関士が乗っており、後方の貨車には既に前の駅からの避難民を乗せて待機していた。私達の大半は無蓋車に乗せられた。伯父は駅への途中、例の朝鮮族の家に立ち寄ってくるからと言って中々現れなかった。痺(しび)れを切らしたTさんは私に迎えに行くよう執拗に迫った。私は何時発車するかもしれない汽車から離れたくなかった。嫌々ながら約一キロの道を朝鮮族の家へと走った。「米澤は来ていませんか？」と尋ねると、「少し前に帰ったよ！」簡単な返事ももどかしく、私の足は駅へと走り出していた。伯父は駅前の一般道を通ったのに対し、私は線路伝いに最短コースを突っ走ったために行き違いになったのだった。走りに走って私は無事駅に戻ることが出来た。間もなく、「全員乗

車せよ！」との号令が掛かったが、伯父はなかなか乗ろうとしない。早く乗るよう促すと、伯父は「俺は満州の土になるつもりで来たのだからここに残る。」と言い出し、乗ることを拒否し続けた。周囲にいた同僚の男達も「そんな馬鹿なことを言っては駄目だ！」と言いながら伯父の両脇を抱きかかえて貨車の中に放り上げた。伯父は苦笑いしながらようやく観念して座り込んだ。朝鮮族の家に立ち寄ってどんなことを話してきたのか聞いてみたいと思っていたが、その機会を逸してしまった。汽車は避難民を満杯にして発車した。乗り合わせた人達の会話を聞いていると。数駅後方の湯原（とうげん）という街の警察署が中国人に襲われ日本人の警察官が殺されたとか、また、佳木斯でも同様の事件が起きているなどと物騒な話し声が聞こえてきた。日本人の植民地支配への恨みが中国人達をして峰起せしめたのかと私は子供心にもそう思った。

四．　雨中の逃避行

当日の空は午後から雲行きが怪しくなっていた。数ヶ月前勇んで渡った長い鉄橋を今日は避難民として逃げて渡らなければならない自分が情けなかった。この頃からポツポツと雨粒が落ちてきた。隣から飼犬にまつわる話が聞こえてきた。村に残してきた愛犬が鉄橋のたもとで待っていて車上の主人を見つけるや全力疾走で貨車に飛び乗って来たのだと言って犬を抱いていたのだった。愛犬の美談は人々の心を和ませたがどこかで再び放置される運命にあったに相違ない。雨が激しくなってくると誰一人口を開く者はいなくなった。

次第に貨車の床にも雨水が滴り始め荷物を濡らしていった。雨は上からだけでなく下からも攻めてきた。人も荷物もずぶ濡れになりながらじっと耐えていた。雨具の用意のない私達は耐えるしかない。

眠る間もなく東の空が白み始めた頃、ようやく雨は上がった。汽車は南又（なんさ）という駅の引込線で停車した。人々は一斉に降りて用を足した。腹ごしらえのために石を集めてかまどを造り、木片を拾い集め焚き火をして飯を炊いた。こうして八月十二日の朝食にありつくことが出来たのだった。

汽車は再び前進し始めた。天候も回復し太陽も顔を出してきたので濡れた衣類も自然に乾いた。どこへ行くのかも分からないのに、太陽の光に照らされただけで晴れやかな気分になっていた。午後になってある駅で、「全員下車」の号令がかかった。哈爾濱（はるびん）の少し北の綏化（すいか）という街だった。駅から重い寝具類を背負って歩くこと二十分程だったろうか。そこは日本軍の飛行場だったが飛行機の影は無かった。格納庫が避難民の宿舎にあてられていた。固いコンクリートの床に持参したござを敷き、湿っぽいシーツ様のものを被って寝た。

当時としては三江省の上層部が開拓団をこの地まで避難させるのが精一杯だったのだろう。関東軍は対ソ戦に忙殺されていた為に指揮命令系統が混乱していただろうから避難民を支援する余裕などはなかったと思う。また、現代と違いパソコンも携帯電話もない上に、国家の危機だったから一般人が本土へこの窮状を連絡できる筈もない。

五.　兄との再会、綏化(すいか)市にて

中国人は商魂逞しい民族だと思う。格納庫生活の翌日には、補助滑走路上に彼らの市場が出現した。饅頭、ゆで卵、瓜、西瓜などの他、リアカーに油鍋を積み込んで揚げ饅頭や揚げ卵などを作って売る人達まで現れたが蒸し饅頭売りが大勢を占めていた。彼等も商売が出来て喜んだが、避難民の私達にとっても好都合だった。物売人は日毎に増え常時百人ぐらいはいたと思う。私もよく饅頭を買ったが、ある時糞尿臭の付着した饅頭を買ってしまい全部捨てたこともあった。衛生面では劣悪と言わざるを得なかったが、病気になった人の話も聞かなかった。中国人の少年が饅頭の入った籠を脇に抱え、「マントー、マントー、イーカイチェン、イーガー！」（饅頭、一個一円だよ！）と声高に売り歩いていた声が今も耳に残っている。

八月十四日だったと思う。佳木斯市へ召集をかけられた兄達数十人が戻って来た。彼等が言うには、佳木斯へ行ったが軍関係者は殆どおらず、「どこへ行けばよいのかわからないので帰って来た。」とのことである。そんな話を聞かされても未だ日本の敗戦など口にする人はいなかった。大秋馬産開拓団は綏化市に避難しているはずだとの情報を得て帰って来たのだという。兄との再会は予期していなかっただけに本当に嬉しかった。

六.　終戦

八月十六日の朝、大人達が立ち話をしているのを聞くと「日本は負けた。」「このまま負けで

終わる筈がない。」「裏に何かからくりがあると思う。」「連合艦隊は無傷だそうだ！」などと言うのである。今の今まで神国日本の勝利を信じていた私も一瞬耳を疑ったがよくよく考えてみると、今後戦争で命を失うことはなくなったのだなという思いがじわじわと湧いてきた。同胞達の顔も途方に暮れている様子だった。市場の中国人達の態度もこの日を境に少しずつ変化してきた。今まで中国人を指して、満人と呼んでいたが、彼等の方から「満人じゃないよ！支那人だよ！」と言ったり「中国人だよ！」と言ったりして訂正させられる始末だった。

お昼頃ソ連軍の飛行機が一機低空飛行して赤色のビラを撒いて行った。「中国人民的解放者ソ連紅軍萬歳！」と書かれていた。私には深い意味は分からなかったが「ソ連共産党軍が中国人民を日本の支配から解放した、萬歳！」という内容らしい。

飛行場には若干の日本兵が残っていた。数日後武装解除が行われた。補助滑走路の端に銃、軍刃、短剣などが並べられ、日本兵が数量を紙に記入していたが、ソ連兵の姿は見当たらなかった。私達は十日間ほどここに滞在し、再び貨物列車に乗せられて長春方面へと移動を開始した。一部の人々には日本へ引揚げるまで一時的に長春市に滞在することぐらいは知らされていたのかも知れないが、大半の人々は言われるままに従うしかなかった。

七．　掠奪（りゃくだつ）にあう

貨物列車のほとんどは無蓋車だったが、この時、私達家族は有蓋車に乗せられた。汽車は正午過ぎに出発したが、ある駅の手前で信号待ちをしていた。この時間を利用して用を足す人た

ちが多かった。殆どの人が貨車に戻り、伯父と藤井さんが最後の数人の尻を貨車に押し上げていた時、トウモロコシ畑に潜んでいた数十人の中国人が一勢に襲いかかってきた。最初に襲われたのは藤井さんだった。まるでアリが獲物を運ぶように数人の中国人に手足を引っ張られ、衣服を脱ぎ取られた上、帽子、靴、メガネなど下着以外はすべてはぎ取られてしまった。この隙に伯父は外に残っていた子供達を貨車に押し上げ、自分の体を半分貨車に入れたところで、中国人に靴を掴まれ動けなくなった。左足の靴はすぐ脱げたが右方は中々脱げず難儀した。伯父は「靴はやるから離せ！」と言いながら蹴るようにして脱ぎ捨て車内に逃げ込んだ。「藤井さんより私の方が年上だから先に逃げたのだ！」とはその時の伯父の弁である。最後に残された藤井さんは照れ笑いしながら車内に戻って来た。車内にいた私達は一瞬の出来事に茫然と見ているだけで手も足も出なかった。中国人達は汽車がここで信号待ちをすることをすでに察知して待ち伏せし、避難してくる日本人達を襲っていたに違いない。戦争に敗れた日本人の惨めさと無力さとを初めて経験した事件であった。しかし、掠奪はこれだけで終らなかった。夜になって隣の無蓋車に乗っていた同僚の人達はもっとひどい目にあっていた。信号待ちの貨車に中国人達が乗込んで来て手当たり次第荷物を奪い去って行ったというのである。その時の状況を、有蓋車に乗っていて難を逃れた本間団長のもとへ報告に来た男性の様子を私は少し離れた場所で聞いていた。中国人の貧しさと日本人への恨みが、こんな形で表面化したに違いない。荷物は奪われたが、生命に異常がなかったのは不幸中の幸いというべきだったのかも知れない。現在ならば急行列車で長春まで約四時間の道程であるが、当時避難民を乗せた汽車は一昼夜もかかった。

八．　長春に着く

引込線に止まった貨車を降りて指示待ちをしていた時、後方から校長の沢村先生の声がした。中国人男性が先生の荷物を引張って「よこせ！」と言っていた。赤ん坊を背負った先生の奥さんが、「これは、子供のおむつだから！」と強く制止すると諦めて去って行った。

私達はこれからどこへ連れて行かれるのか知らされぬまま、先頭集団の後に付いて歩き始めた。八月下旬のことだから気温はかなり上がっていた。寝具類を背負い、両手にも包みを下げての歩行だからみんな息を切らしながら進んでいた。伯父は「重いなあ、捨てたくなったよ！」と両肩に食い込んだ背負紐に親指を差し込んで、私に話しかけた姿が目に映るようだ。果てしない行軍のようなものだったから余計に疲れたのだろう。やがて大路に出た。空港に通じる興安大路（現在の西安大路）である。ここから更に少し歩いたところで目的のレンガの建物が見えてきた。満鉄の建物で「大和寮」という三階建ての独身寮だった。私達開拓団は全員一階部分を割当てられていた。十畳間位の部屋が二十室程あった。私達家族四人の他に近藤さん家族五人が同室となり生活することになった。

九．　日々の生活

部屋では各家庭毎に食事を作った。主食は米と高粱（こうりゃん）を一対一に混ぜたものが多く、たまに米

と餅粟のご飯を食べた。副食はよく覚えていないが、香りの強い田芹を近くの畔から取って来てよく食べた。味噌汁の具、お浸し、漬物までおかずは全て田芹なのだからうんざりだった。お金がなくて米が買えない時は、安価な高粱飯だった。高粱は米粒より少し大きく赤褐色しており、何度も研ぐことで白くなるので白米のつもりで食べたが粘りがないので不味い。こんな食生活だったから栄養不足のため、病気にでもなれば抵抗力も弱く、死亡する人も多かった。

調理は電熱器を使って自室で行ったが、水道、トイレは共同だったし、風呂などは殆ど入れなかった。

十月に入り瀋陽（しんよう）への移住希望者を募る話があった。同室の近藤さん家族は「少しでも日本に近いところにいれば帰国も早いはずだ。」と言って手を挙げ移住して行った。その跡へ同僚の島津さんが、同居人の婦人を連れて入室して来たので、たちまち満杯となった。この頃伯父と兄は満鉄の営繕課に職を得て生活も少しは安定してきた。伯父は大連の満鉄本社に勤務する末弟（与作氏）に逢って見たいとしきりに言っていたが、交通事情がままならず果たせなかった。弟に逢えれば窮状打開の突破口を見出せるのではないかと考えたのかも知れない。末弟と私との後日誌だが、氏は終戦後満鉄を辞し大連のデパートの一角を借受けて知人と時計店を営み成功していたので、長兄に逢っていたら、別の道が拓けていたかも知れないと語り合ったこともあった。

ありし日の新京駅（長春）

（旧）ヤマトホテルより(新)長春駅を望む（平成7年）

十．　メータン・ショートル（石炭泥棒）

郊外の処々に満鉄の機関車から捨てられた石炭灰が野積みされていた。女性や子供達は小さな布袋を持って灰の中に残っているコークスを拾い集め、売って僅かばかりの収入の足しにしていた。また、年長の少年達は満鉄の構内に忍び込み、石炭を盗んでくる行為が横行した。称して、「メータン・ショートル」である。

歎異抄（注1）の中に「さるべき業縁（ごうえん）のもよおせばいかなるふるまいもすべし」という一節があるが、その通りであったと思う。子供達は心を痛めながらも、石炭を盗んで来ては生活費に協力しようとしたのだった。コークスや石炭は「ボロ買い」と称する中国人の廃品回収業者に売るのである。「ボロ買いまーす。」、節をつけて南京袋を肩にした中国人が現れると廊下に走り出て買ってもらうのだった。

ある冬の日の午後、数十人の子供達が石炭の山に群がって布袋に石炭を詰込んでいるところを中国人の監

ありし日の新京（長春）の街角　ビルの屋上には満州国旗が見える

視員に見つかり、一網打尽に捕まった。全員が客車に押込まれ、一晩ここに泊められてしまった。親達は心配したが、翌朝全員無事開放された。子供達が言うには監視員は叱責するどころか極めて親切で「寒くはないか？」「トイレは大丈夫か？」「お腹は空かないか？」などと優しく対応してくれたという。私にも危うい経験がある。夕暮れ時、満鉄構内で失敬した石炭を麻袋に半分ほど詰込んで背負い、一人で帰る途中、小高く土盛りされた線路上を横切ろうとした時、右手から銃を肩にした中国人の監視員が歩いて来るのに気付いた。急に引返せば怪しまれるし、そのまま進むと呼び止められて詰問されるだろう。仕方なくそのまま進むことにした。監視員の十数メートル前をうつむき加減で、思い切って横切った。天の助けか私は呼び止められなかった。あれはきっと見逃してくれたのだと思う。麻袋の中は見えないが日本人の子供が構内から背負って来るものと言えば察しが付くはずだ。それとも私の歩き方が自信あり気だったのだろうか、絶体絶命のピンチを逃れて一般道に出た時の気持ちは一生忘れられない。一般道と言っても殆ど車は通らない。少し行くと例えようもない異臭がする箇所があった。人間が道端で死亡して腐っているのだ。ここを歩く時は息を止めて走って通り過ぎたものだった。衣服からみて中国人の遺体のようだった。暗い気持ちで私はこの場所を小走りで通り過ぎた。

十一．　小間使いに雇われる

十一月中旬、私は、本間団長の長女（吉井みどりさん）の紹介で、日本人で、従来から長春市に住み、土建業を営んでいた江尻（金太郎氏）家に、住込みの小間使いとしてお世話になる

ことになった。この家はアパート業も営んでおり、その建物の端の区画に住んでいた。夫婦と子供二人、女中一人の五人世帯だった。私は一年生ぐらいの男の子の家庭教師と買い物、庭掃除など雑事を受け持つぐらいで、忙しくはなかった。食事は家族と一緒だったから、白米を食べ、時には、すき焼きも食べることが出来たが、立場上、肉には箸を伸ばさないように気を遣っていた。しかし奥さんが私に「お肉も食べなさいヨ。」と気を遣って下さったのが嬉しかった。アパートはコの字型に建っており、中庭があった。六世帯ぐらいが入居しており全員が日本人だった。防犯のため、中庭の左側の空間部分を高い板塀で被い出入口は二重扉にして賊の侵入を防ぐようになっていた。江尻家は大家なので自宅脇に専用の出入口を設けてあった。ある日の夕暮れ時、江尻家の台所のガラス窓を叩く者があった。仕方なく主人が窓を開けると、「内側の扉の鍵を開けろ！」という。毎日夕方には主人が自宅専用出入口の二重扉の錠前を確認していたのだが、この日ばかりは外扉の施錠の確認を忘れたらしい。内側扉を開けさせたのは中国人の警察官三人組だった。土足のまま入って来て、家族六人を茶の間に集め、リーダー格の人物が言うには「昨晩市内の二箇所で発砲音がしたので警戒中だ、調べさせてもらう！」という。他の二人は奥の座敷の箪笥の中をあさっていた。めぼしい衣類を抱えて陰の台所から風呂場を通って逃げるようにして出て行くのが見えた。主人は「銀行の通帳だけは置いて行ってくれ。」と頼んでいた。背広は数点持去られたが、預金通帳は置いて行ったと聞いた。衣類はヤミ市ですぐ現金化出来るが、預金通帳は足がつき

ありし日の新京吉野町（長春）

易いし当時、銀行は営業していなかったので持って行かなかったのだろう。警察官が強盗を働く時代だから自衛するしかない。強盗が去った後、アパートの住人達が気付いて駆けつけて下さったが、あとの祭りだった。完璧に防御していた筈が、一寸の気の緩みから大事に至ってしまった事件だった。こんな事があった数日後の早朝、開拓団の吉井みどり（旧姓本間）さんから伯父の容態が思わしくないので直ぐ帰るよう伝えられた。

十二．　伯父の死

快方に向っていることを祈りながら、リンゴを数個買って約三十分の道程を急いだ。ドアを開けた途端、顔面に白い布を被った伯父の姿が目に入った。予期していなかったので、ただ茫然と立ち尽くすばかりだった。そして伯父と対面すると、安らかな顔であった。同僚で幌延町出身の津田さんの奥さんが弔問に来て下さっていた。この方のご主人も伯父と同年輩で発疹チフスで既に死亡されており、Tさんと共に悲しみを分かち合っている様子だった。（弔問に来られた津田さんの奥さんも後日、同じ病気で死亡された。）伯父は「眞一は未だ帰って来ないか！」と何度も尋ねていたという。その願いを叶えて上げられなかったことが今でも悔やまれる。満州へ連れて来た私達兄弟に託びたい気持ちを伝えたかったのかもしれない。不思議にも北海道に残してきた妻や息子のことは全く口にしなかったという。

発疹チフスは罹患すると数日にして四十度を越す高熱が出て、大抵の人は意識を失う。伯父

もそのタイプだったようで安らかに息を引き取ったそうである。日本人で佳木斯医大出身の医師が市内で開業しておられたので往診をお願いしたが病状は好転しなかったという。開拓団の仲間の方々の助けを借りて葬儀の準備をした。金銭的な余裕もなく土葬にすることになった。お骨に代えて髪と爪を切り取った。死に装束もなく寝巻きのまま納棺した。お経の読める同僚の方にお願いして自室で葬式をした。近くに見晴らしの良い丘があり、避難民の墓地となっていた所に埋葬した。一部の貧しい人達は棺も準備できず布切れに包んで埋葬した為、野犬に荒らされた例もあるやに聞いた。白木の板に「故米澤源作之墓」と墨書して建てた。僅か四ヶ月前、浩良河駅で避難することを拒み満州の土になることを望んだ伯父は遂に長春の地で、その望みを果したのだった。

享年四十九歳、昭和二十年十二月十六日が命日である。

伯父の死を契機に私は江尻家の小間使いの仕事を辞めた。兄と寝食を共にしたい気持ちが強まってきたからである。

十三. ソ連兵の進駐

街に進駐していたソ連兵は教育の程度も低く貧しかった。時計や万年筆を欲しがった。日本人から手当たり次第取り上げ、片腕に二個も三個も時計を付けて喜んでいたが、取扱方法を知

らない者もいたらしい。ソ連兵は戦争が終ったのに友好国である筈の中国で軍票（占領軍が敵国で物資調達の為独自に発行する紙幣）を使っていた。中国人から物資をただ取りするのと同じ理屈である。中国側の了解を得ての行為としても一寸不可解な感じがする。

また、ある冬の日の夕方、食事を摂ろうとしていた時、廊下の非常ベルが鳴り続いた。寮の正面玄関脇に守衛室があり、寮の入室者が二名ずつ当番制で自警員を務めていた。ベルのスイッチはここにあった。以下は直ぐに駆け付けた兄の弁である。偶々玄関の扉が開いていたらしく、若い三人のソ連兵が自動小銃を持って侵入して来た。慌てて自警員はベルのスイッチを押したので、ソ連兵は驚き、二人は逃げたが銃を持たない一人は取り押さえられ守衛室へ連れ込まれた。日本人の男性達が何事が起きたのかと集まって来たので、ソ連兵はロシア語で何か説明を始めたが、通じる訳もない。銃を持って逃げたソ連兵が同僚救出の為に外から一言呼びかけたかと思うと突然自動小銃を十数発撃ってきた。日本人達が怯（ひる）んでいる隙に残されたソ連兵は廊下に走り出て二階への階段の踊り場の窓から逃げて行ったらしい。兄は戻って来てから右肘が痛むと言うのでよく見ると一寸赤くなっていた。銃弾のかすり傷だった。ソ連兵は飛び降りた際、布製の略帽を落として行った。翌日自警員の代表がソ連兵の駐屯所に帽子を持参し、抗議すると上官らしき人物が出てきて陳謝したという。

「ヤポンスキー・マダム・ハラショウ（日本人の婦人は素晴らしい）」こんなロシア語をよく耳にしたものだ。日本人女性は頭髪を短く切ってソ連兵から身を護った。敗戦のツケは立場の弱い女性に負わされた。

十四．　八露軍

毛沢東を頂点とする中国共産党軍は八露軍（はちろぐん）と呼ばれていた。終戦までは蒋介石軍（国府軍）と共同して日本軍に立向かっていたことは後で知ったが、終戦後は思想を異にする両軍の対立は激しさを増して行くことになる。

昭和二十一年二月頃だったと思う。私達の住んでいた大和寮の近くで国府軍の兵士が塹壕を掘り始めた。初めは何が起こるのか分からなかったが、どうやら八露軍が攻めて来るらしい。翌朝になると外が騒がしくなった。私達の寮はレンガ建てなので流れ弾の心配はなかった。友人と三階に上って戦況をみることにした。遥か西方の草原に匍匐前進をして来る八露軍の兵士達の姿が見えた。子供の頃戦争ごっこをしたことを思い出させる光景だった。幸い戦闘は遠退き、その夜は一晩中しきりに発砲音が鳴り響いていた。戦いが静まったので翌朝、興安大路の方に行って見ると街角のレンガ建てのビルに砲弾による大きな穴があいていた。「昨夜は負傷兵を運ぶ担架が激しく行き交ったんだよ。」と戦いの様子を語ってくれる人がいた。どうやら軍配は八露軍に上ったようだ。この様な内戦があっても私達の生活には全く影響がなかった。

中国の現体制が誕生するまでには、この様な過程があったと言うことを記憶に止めておくべきではないかと思う。社会主義革命に限らず、人間が自己主張をするために流血の歴史を繰り返すことは悲しいことだ。

十五．　善ちゃんの死

六年生で「善ちゃん」と呼ばれていた体格の良い男の子がいた。ある日の午後腹痛を訴えて帰宅したので、心配した母親はいろいろと尋ねたが要領を得ない。「さっき裏庭で大きな音がしたが、それと関係はないのか？」と母親が善ちゃんに尋ねると「そんな音がしたか？」と自らの行為を母に知られたくないので、本当のことを言わなかった。

実は寮の近くに旧日本軍の古い兵舎があり、廃墟となっていたが、ここに数珠繋ぎになった薬きょう付きの機関銃の弾が転がっていた。善ちゃんはそのうちの一発を持ち帰り裏庭で叩いて何かを創ろうとしていたらしい。偶々信管に触れ暴発して弾丸が善ちゃんの腹部に命中してしまったようだ。母親はお腹のどの辺りが傷むのか診てあげようと衣服のボタンを外すと血痕が滲んでいたので、全てが分かった。充分な手当ても出来ないままにその夜、善ちゃんは亡くなった。

こんな事件があって、初めて放置された銃弾の怖さを知った。実は私も繋がった銃弾を踏みつけて歩いたことがあった。信管に触れていれば命は無かっただろうと思うとぞっとする。善ちゃんは身を以って私達にその危険性を教えてくれたのだと思う。合掌。

十六．　ソ連兵と米粥

満鉄の西側に旧日本軍の飛行場があった。付随して数棟の兵舎が建っていたが、その殆どは廃屋となっていた。枯れ草の上に雪のまばらに残る敷地内を友達数人で会話しながら歩いてい

ると、突然一棟の兵舎からソ連兵が現れ、私達を手招きした。驚きながらも無視するわけにもいかず、これに従った。服装からして炊事係のようだ。廊下に入ると凍った馬鈴薯を十数個、バットに入れて持って来た。数丁の皮剥器を私達に手渡して皮を剥くよう命じた。私達は北海道で立派な馬鈴薯を食べていたので、こんなものをどの様にして食べるのかと疑問に思いながらも数分で剥き終えた。これで帰してくれるのだろうと思っていると、ソ連兵は部屋の奥から両手付きの大きなアルミ製の空鍋をぶら下げて来た。鍋底には粥がこびり付いており、これを私達に嘗めろ、と言うのである。仕方なく指先で少し嘗めてみると意外に美味しい。米をラードで粥状に煮込んだ食べ物だった。黒パンにでも塗って食べるのかなと思った。凍った馬鈴薯の食べ方も知りたかったが、双方とも言葉が通じないので、ただ笑顔と身振りで意志を伝え合うしかなかった。日頃大した物も食べていなかっただけに私達にとって粥はご馳走だった。しかし残念ながら鍋底の粥は数回の指先移動でなくなってしまった。私達が嘗め終わるのを見届けたソ連兵は年長の私に手を差し出して握手を求めて来た。私は同僚の子供達を代表して、その手に応えた。温かい大きな手と小さな私の手は、がっちりと握られた。ひと掻きの粥よりも彼との握手に大きな喜びを感じた。ソ連兵に対して友情を抱いたのは言うまでもなかったが、彼と再び逢うことはなかった。

十七．　兄を失う

戦前戦後を通じて、日本人も中国人も虱（しらみ）に悩まされた。私達も衛生状態が悪かったので、虱

に苦しめられた。秋に入ると虱が媒介するといわれる発疹チフスが大流行した。前述したが、伯父もこの伝染病で命を落としている。

三月下旬、今度は兄がこの病気に罹ってしまった。完治する人もいるのであまり心配もしていなかった。保仁(ほじん)医院の日向(ひゅうが)院長に往診をお願いし、注射と投薬を行ってもらった。四十度以上の高熱で脳を犯され、五日目あたりからうわ言を言うようになった。「心臓が弱っていますねえ。」と同院の大塚医師が言っていたが、やがて良くなるものと思っていた。氷のうで額を冷やし、熱を下げるようにして見守るしかなかった。

発病して一週間位した夜十時頃、兄の呼吸がいつもより荒々しいのに気付いた。私は眠い目を擦りながら枕元で見守っていたが為す術が無かった。Tさんが「呼んであげなさい！」と助言してくれた。「兄さん！兄さん！」何度も呼んで見たが返答できる筈もない。次第に呼吸も静まり兄は穏やかに息を引き取った。

想像もしていなかった事態にただ茫然とするばかりだった。目前の現実を即座に受入れることが出来なかった。本人にしてみれば、伯父の要請で満州まで来て、このような最期を迎えようとは想像だにしていなかっただろう。私としてもたった一人の兄弟をここで失うとは夢にも思っていなかった。今まで歩んできた二人の兄弟愛を思い出すにつけ涙が止まらなかった。持ち金の余裕も無く爪と遺髪を切ってお骨に代え、土葬することにした。開拓団の人達の手を借りて自室で簡単な葬式をした。僧侶の代わりにお経を知っている方に読経して貰った。般若心経だったと思う。路傍の石片で棺の蓋に釘を打ち始めた時、兄が不憫で思わず声を出して泣いてしまった。兄に告げたかった最後の言葉を数行ばかり書き記した紙片を棺の中に入れてお別

れした。これまでお世話になったお礼と、一人残された私の背負う責任を必ず果たすとの決意を書いたように記憶している。四月というのに表土は凍結していて墓穴を掘るにも三十センチ位はツルハシを使用しなければならなかったという。同僚の皆さんのご配慮で伯父が眠る場所の近くに埋葬されることになった。土中に納まった棺に土を被せ始まった時、可哀想な兄の生涯を思いやり、他人目も憚らず、大声で泣いた。声も涙も自然に溢れ出て、押し留めることが出来なかった。伯父と同様に白木の板に「故長谷田忠夫之墓」と記し墓標とした。

享年二十一歳。昭和二十一年四月五日が命日である。

この墓標も後日心無い人に持ち去られ、身内の遺体を荼毘に付す際の燃料にされてしまうのだと聞いた。四ヶ月前に埋葬した伯父の墓所にも既に墓標はなかった。共同墓地なので、手を合わせる場所さえ不明になってしまうことも、また悲しい現実だった。

十八．　荼毘の煙

発疹チフスが大流行したために肉親を失う人々が多かった。火葬してお骨を日本に持帰れた人は恵まれた少数の人達だった。私も伯父や兄をお骨にして故国の地に帰してあげたいと思わない日はなかったが、毎日の生活が精一杯で金銭的に困窮していたから望みを叶えることが出来なかった。自分で燃料を用意出来る人達は廃材集めに目を光らせていた。ある晴れた日の朝、

遠くに見える旧日本軍の兵舎が壊され始めているのが見えた。一棟の兵舎は群がる人々によって忽ち廃材と化し、持ち去られてしまった。廃材はどんな燃料に使用されたかは確認する術もなかったが、そんな情景は特異なものではなかった。同僚の手を借りて肉親の棺を掘り起こし人家から離れた郊外の窪地で荼毘に付すのであるが、煙は強い西風に乗って人々の通る道を横切ることも度々あった。形容し難い異臭を帯びた煙だ。子供達は「臭い！」と言って鼻をつまんだり、息を止めたりして急いで走り去るのだった。「鰊を焼くような臭いだね。」、「いや少し違う」・・・などと煙の通過した後にその感想を述べ合った。肉親の煙ならば涙を流し、合掌して見送るであろう煙を他人のものならば異臭として逃げ去る自己中心的な悲しい人間の性を今にしてつくづく思う。人々は厳しい環境下で人間としての正しい判断力さえ失っていたのかも知れない。

十九.　兄と食べたうぐいす餅

雛祭りの頃の夕方のことだった。兄の職場（満鉄）に立ち寄って一緒に帰宅する約束をしていた。外はまだ明るかったが外気の冷たい夕暮れ時、路上での二人だけの会話も弾んだ。「寒くないか？お菓子を買って来たから一緒に食べようヨ。」と言って、兄はポケットから、紙に包んだうぐいす餅を取り出した。美味しそうな餅が四個、兄の掌に乗っていた。私は先ず一個だけ食べた。とても甘くて美味しかった。兄は美味しそうに二個とも平らげて、遠慮している私に当然のように残りの一個を食べるよう促した。長春に来てから甘い菓子など殆ど口にして

いなかったので、兄の私に対する思いやりが嬉しかった。大した余裕もない生活だったから同室の人達に振舞うことも出来ず、四つだけ買って二人で食べようと思ったのだろう。

こんな事があってから一ケ月後、兄と永遠の別れをしなければならないとは考えもしなかった。兄弟としての思い出はたくさんあるが、道すがら一緒に食べた、あのうぐいす餅が最後の思い出となってしまった。毎年雛祭りの頃、デパートの地下街で美味しそうなうぐいす餅を見つけるとあの時の兄の顔が浮かんでくる。

二十．　発疹チフスに罹る

五月にもなると凍結していた表土も溶け、草木も芽生え始めた。何となく体調が変なので、日向院長に診て頂くと発疹チフスだという。とうとう私も流行病になってしまったのかと安静にして寝ていた。伯父も兄もこの病気で失命しているので、私もその二の舞になるのではないかと心配していた。

数日して、四十一度の高熱が出たが、うわ言などは言わなかったそうだ。余りにもおとなしく寝ているので、同室の島津さんからは「こんなにおとなしい病人を見たことがない。」などと褒められる程だった。特に苦しいこともなかったので、内心このまま治るのか、それともこれからもっと苦しくなるのかと不安を抱きながら寝ていた。幸い、約十日間ほどでほぼ回復し

た。Tさんが、元気が付くからと、お粥に生卵を混ぜた食事を作ってくれた。病後のせいか、美味しさはあまり感じなかったが、Tさんの親切心が身に沁みてとても嬉しかった。

翌日、寮の玄関脇に出て日光浴をしていると、下級生の高橋君から私の足の甲が真っ黒いと言って大笑いされた。高熱のために足の甲の皮膚が黒くなるのだが、部屋に帰って温湯につけて擦ったらすぐに落ちた。

その数日後、今度はTさんも発疹チフスに罹ってしまった。恩返しのつもりで看病した。幸いにも軽く済んだので安心した。

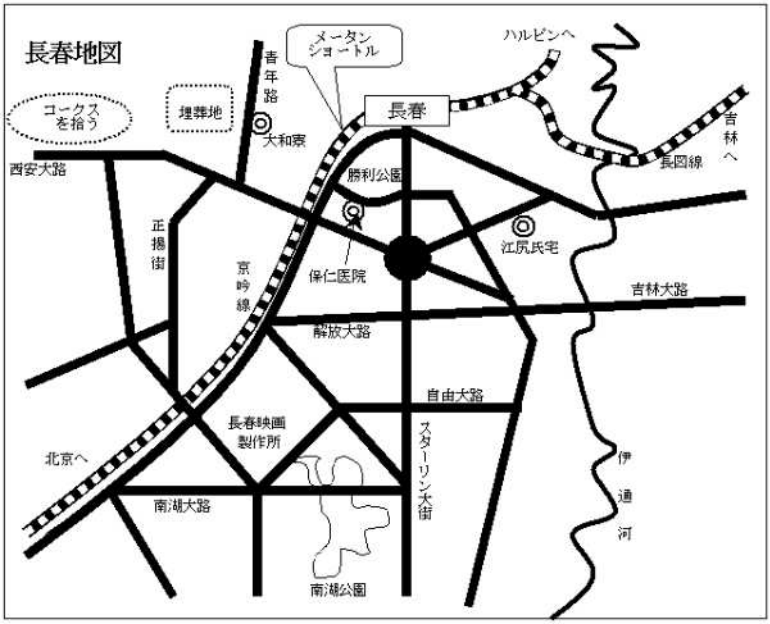
同僚の中で発疹チフスに罹らなかった人は希れだった。治って本土の土を踏んだ人は幸いと思わなければならない。

二十一．　勇気をもらう

初夏の頃、子供達に勇気と希望を与えようと相撲好きの大人達が空き地に土俵を作り、近隣の避難民の小学生を集めて、連日相撲大会を開いていた。出場の細かいルールは分らないが三番勝負が多かった。大人も子供も土俵を囲んで小さい者が大きな者を倒した時には、大いに沸いた。私は発疹チフスも癒え体力も回復して来たので興味本位で観戦の輪に入った。常連の大男がその日も最後の勝ち抜き者だった。大人達は挑戦者を探していた。友人が私に出場をけしかけたが断った。とても勝てそうになかったし、ぶざまな負け方を見られたくなかったからだ。そのうち大人達までが、盛んに私の出場を促すので、私は引っ込みがつかなくなって、とうと

う土俵に上がってしまった。身長、体重から言って、勝てる相手とは思えなかった。一番目はあっさり寄り切られた。観衆は「やっぱりなあ。」と溜息をついて二番目に期待した。二番目はがっぷり四つになって、動かない状態になった。私は咄嗟に相手のまわし（腰ベルト）をグッと下方に引いた。相手は土俵にバッタリと両膝をついた。ほんの一瞬の出来事だった。勝ってしまったのだ。自分でも信じられない程だった。観衆は大喝采した。大人達は勝者に対して懸賞金を積み増した。「この子は手を知ってるな。」と囁く声が聴こえた。いよいよ三番目、最後の取り組みだ。私は殆ど自信はなかったが、郷里の村祭りで相撲を取ったことを思い出して渾身の力を出したが力負けであっさり土俵を割ってしまった。大人も子供も落胆の声を上げた。積み上げられた懸賞金は勝者の大男に授けられた。負けて立ち去る私に「その子にもやってくれ！」と言って、数枚の紙幣を差し出してくれた大人がいた。見知らぬ人だったが嬉しかった。出場を勧めてくれた友人は私が懸賞金を取れなかったことに同情した。私は負けたとは言え一勝を賞めてくれた人々に感謝した。伯父や兄を失って失望の日々を送っていた私に勇気と希望を与えて下さった人々よ、有難う！

長春地図


長春地図
メータン
ショートル
ハルビンへ
青
年
路
ゴークス
を指う
埋葬地
大和寮
長春
吉
林
へ
長図線
西安大路
勝利公園
正
揚
街
京
吟
線
保仁医院
江尻氏宅
吉林大路
解放大路
自由大路
長春映画
製作所
スターリン大街
北京へ
伊
通
河
南湖大路
南湖公園

二十二.　引揚開始

七月下旬、待望の帰国の日が突然やって来た。「明朝、前庭に集合」のお布令が廻った。寝具類は放置して、身廻品だけ持参するようにとのことだった。

早朝、伯父と兄の墓参も考えたが、墓標もないと聞いていたので、私一人、裏庭から墓地に向かって合掌した。共同墓地に通じる道には数十本の街路樹が生い茂り道の西側には崩れかけたレンガの廃墟が無残な姿をさらしていた。歩けば数分のところだが墓参する人の姿はなかった。伯父、兄の遺髪と爪の包み紙を木箱に入れて、身廻品と一緒にリュックサックに詰め、前庭に集合した。

リーダーの人が人員確認のため点呼を取り始めたが、最終的に二人の婦人がいないことが分かった。ＩさんとＷさんだった。二人ともご主人が現地応召されていて不在だったが、Ｉさんには五年生ぐらいの妹がいたし、Ｗさんには六十歳ぐらいの父親がいた。不明の二婦人は中国人男性と親しくなっていたらしいが、当日まで誰も気が付かなかったようだ。已むなく二人を残して出発した。いわゆる中国残留日本人妻になったのだろう。Ｉさんの消息は聞かないが、Ｗさんは一時帰国をして郷里に父を訪ねたが、父は既に他界していたという。戦後の混乱が引き起こした悲話と言うべきだろう。

二十三．　引揚列車

長春駅の少し南に仮設のプラットホームが造られており、私達は再び無蓋貨車に乗せられた。天気も良かったせいかみんな晴々とした顔に見えた。発車は午前十時過ぎだったと思う。汽車は順調に進み、翌朝、目覚めたのは錦州（きんしゅう）という街の手前あたりだった。

汽車が信号待ちをすると、中国人女性達が黄色く色付いた杏の実を竹籠に入れて売りに来た。隣の人から一個頂いて食べてみたが、酸っぱくてまずい。でも空腹だったので胡瓜を買って生のまま食べた。何処へ行っても中国人の商魂には感心させられた。間もなく、終着駅のコロ島に着いた。この港は旧日本軍の軍港で未完成のまま終戦を迎えたと後で知った。ここには俄か造りの引揚者用施設があり、着衣のまま一泊した。

二十四．　引揚船（名優丸）

太陽の照り続ける早朝から港前の広場に一列に並んだ。手荷物を地面に置き、人々は列のまま前進してＤＤＴの粉を噴霧された。手荷物に戻って見ると、そこにも白い粉がかけられていた。ＤＤＴの粉の威力は抜群で今まで私達を苦しめてきた中国の虱は全滅した。

消毒の終ったグループから乗船した。船腹の脇に取り付けられたタラップを昇りながら、これでいよいよ中国ともお別れかと思うと伯父や兄のことが思い出され複雑な気持ちになった。引揚船は貨物船「名優丸」だ。五～六千トンはあったろうか、ここまで来ても未だ私達は貨物扱いだった。船倉は俄か造りの木造二階式の広間で、各階へは梯子で昇り降りした。船が岸壁を離れ陸地で手を振って見送ってくれる人々の姿が小さくなった頃、一人の男性が船尾から陸地に向って「バカヤロー！」と大声で怒鳴った。ひどい目にあった悔しい気持ちをこの一語に込めているようだった。一瞬そんなことを言ってもいいのかとみんな顔を見合わせたが「此処は日本だ！」と思い直し聞き流した。

乗船して二日目の夕方、船尾の甲板に人だかりが出来たので行って見ると水葬が行われるところだった。遺体はくすんだ茶色のシートに包まれ両サイドに重りが付けられていた。大きさから推測する

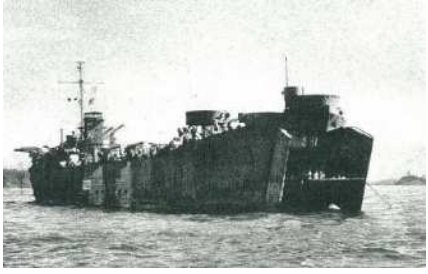
引揚船での水葬
（出典：毎日新聞社）

に大人の人と思われた。一連の儀式の後、遺体は飛込台のような板の上を少しずつ静かに押し出され海中へと落下して行った。永い汽笛が鳴らされ、落下点を中心に船は大きく一周した。引揚船まで辿り着きながら、本土の土を踏めなかった本人はもとより、遺族の方々の無念さを思うと胸が痛む。

二十五.　船中にて(続)

中国コロ島から二昼夜かかって漸く、九州佐世保港内に着いた。随所に引揚船らしき貨物船と、米軍のＬＳＴ（戦車陸揚艦）が船首の開口部を大きく開けて停泊していた。

すぐ上陸できるものと思っていたが、八月の暑い中、全くその気配がなかった。船倉よりも甲板の方がまだ涼しいので日中は甲板で過ごす人が多かった。貨物船なので数基のウィンチがあり、アームから垂れ下がったワイヤーの先端にはコンクリートの丸い平板の重りが付いていた。偶々二年生ぐらいの少女がオモリの上に腰を降ろしていた時、誰かが誤ってワイヤーロープの巻上げレバーに触れたらしい。少女は重りと一緒に宙吊りになってしまった。おまけにアームは海上の方へ向きを変えてしまったので、驚いた少女は泣きながらワイヤーロープから手を放し、約５メートル下の海中に落下



ＬＳＴ（戦車陸揚艦）

してしまった。こんな時助ける神はいるものだ。船員ではなく、いつも海水パンツ一丁で暇を持て余しているように見えた引揚者の青年が、すかさず海中に飛び込みを敢行した。溺れている少女を抱き上げると船上から浮輪が投下され、続いて縄梯子が降ろされて少女は無事救出された。

首を長くして下船の許可を待つうちに検便が行われ数日後、三名の引揚者が疫痢保菌者として上陸させられた。また故郷へ手紙を出したい人は書くようにとのことだったので、早速北海道の父方の伯父（長谷田勇次郎）へ、私が無事であること、近日中に帰郷できること、そして残念ながら満州で死亡した二人のことを書いた。一年振りの便りに本家の伯父達はとても驚いたそうだ。

引揚船には約一ヶ月もおかれた。そして八月も下旬になりやっと上陸の許可が降りた。三十人乗りぐらいの小さな遊覧船らしき船で湾内を移動し、上陸したのは夕暮れ時だった。一年四ヶ月ぶりにやっと日本の地を踏んだことになる。着いたところは、港と言うより寒村といった感じだった。みんな日本に上陸したということだけで満足した様な顔をしていた。祖国とはこんなにも有難いものなのかとつくづく思った。収容施設での夕食は雑炊だったが、空腹感を満たすには充分だった。食後、一千円を限度として満州国の通貨と日銀券とを両替するので申告するようにと言われた。私は千円にも満たない小額のお金を両替して貰った。お金持ちの人は他人の名義を借りる人もあったと聞く。

二十六・　故郷に向って

翌日朝、私達には、どこまで乗っても通用する国鉄切符が渡された。そして佐世保駅の引揚者専用ホームから団体列車に乗せられたが、満州では貨物車にばかり乗せられていたのに、日本では客車だったのが嬉しかった。同じ引揚船で過ごした他の団体もここからは自分達の故郷を目指して帰って行った。私達北海道組は本間団長のもと、約八十名で東京を目指した。

長春で同室だった島津さんの同居人の婦人は島根の実家に帰えると言って、倉敷駅でお別れした。

一夜明けて東京品川駅に着いた。ここから上野駅まではなんとしても山手線に乗り換えしなければならない。電車の車窓からは戦後の焼け野原が目に入ってきた。「日劇」と書かれた看板のある円形の建物が目に入った。有楽町だった。また、東京駅だったと思う、車内に子供を連れて私の隣に立っていた同僚の奥さんへ電車の窓越しに篤志家(とくしか)らしい一人の婦人が引揚者を労うように、白米のおにぎりを数個差し出して、「ご苦労様でした。どうぞ元気を出してください！」と、優しく声を掛けてきた。奥さんは「どうも有難うございます。」と感激した様子だった。私は内と外との会

品川駅の引揚者を迎える様子
(出典：毎日新聞社)

話を傍らで聞いていて心の和む思いだった。恐らく姿格好を見て引揚者の団体と判別がついたのだろう。国内では主要駅や乗換駅などで「引揚者援護局」の腕章をしたボランティアの大学生らしき人々が無料で食事等の世話をしてくれたので大助かりだった。

上野駅でもう一度乗り換えると青森までは眠っていけるが、憧れの東京とお別れするのが惜しいような気がした。上野駅はさすがに混雑していたが団体の列に遅れないように気を付けながら乗り換えた。青森までは汽車に乗り通しなので疲労も溜まって外の景色の印象は残っていない。多分殆どの時間は眠っていたのだろう。

暗くなって青森駅に着いたが連絡船乗船の時間までまだ余裕があるというので駅の外に出て見た。特産の蒸した烏賊を買って食べてみたが味は期待外れだった。青函連絡船は早朝には函館に着き、直ぐに札幌を目指した。長万部では、瀬棚出身の高橋さんとお別れした。札幌へはお昼頃到着したような気がする。

二十七．　解散

開拓団の要となり、団員達の拠り所となってこられた本間団長が私達を札幌駅の待合室に待たせて、道庁へ帰国の挨拶に行かれた。国策とは言え、私達を満州へ送り出した道義的責任を道庁の人達は感じたのだろうか、僅かながら私達に見舞金が出たと言って、本間団長から手渡された。数百円だったと思うが予期していなかったので嬉しく思った。ここで一同解散となり、各自思い思いに出身地に向うことになった。私は一年間お世話になったTさんともここでお別

れした。満足な感謝の気持ちも表せず申訳なく思う。どうしておられるのか健在ならば是非、お逢いしたいものだ。

札幌からは私一人だけの旅となった。札幌駅の改札を入ると直ぐ旭川方面への汽車が来たので走って乗った。郷里羽幌までの接続は実に順調で、夕方六時過ぎには羽幌に着いてしまった。札幌駅で時刻表も調べずに伯父（勇次郎）あてに「アスカエル・・・」と打電していたので当日中に到着してしまった私を羽幌駅まで迎えに来る人は誰もいなかった。夕闇迫る約六キロの田舎道を本家の伯父（勇次郎）の家へと急いだ。本来ならば一緒に語り合いながら帰える筈の伯父（源作）と兄（忠夫）は小さな木箱に入って私に背負われていた。幼い頃から歩き馴れた道だったし、懐かしい故郷の山河に包まれた安堵感からか少しも寂しくはなかった。外は薄暗くなっていた。本家の玄関に立った時、叔母（ハル）が独り、一日早すぎた私の帰りを「父さんが明日駅まで迎えに行くといっていたのに。」と言いながら温かく笑顔で迎え入れてくれた。間もなく伯父も帰宅し一年振りの再会を喜びあった。伯父（勇次郎）も叔母（ハル）も痩せ衰えた私の姿を見て涙しながら、死亡した伯父（源作）と兄（忠夫）の遺髪と爪が入った木箱を仏前に供え香を焚いて合掌した。九月の足音がすぐそこまで近づいて来ていた。私の満州における苦難の旅はここで終った。

第三章　追想

一・　墓参

平成七年、妻と中国東北部へのツアーに参加して、再び長春の地を訪ねることが出来た。このツアーには仙台市在住の古川弘平医師と一緒に参加した。幸いにも氏には長春市に知り合いの李医師がいた。彼は、東北大学医学部に留学の経験があり、当時は長春市のベチューン医大の学長をしている著名な方である。李医師とは長春駅で落ち合った。

早速、李医師の車で旧満鉄独身寮「大和寮」を目指したが中々見つからなかった。見当をつけていた辺りをぐるぐる回り、三周目にして、やっとそれらしいレンガ建ての建物に辿り着くことが出来た。（現在は春揮路、旧千早町である。）当時、「菊水寮、千早寮、大和寮」と三棟あったはずが、見ると一棟のみが残っており、幸いにもそれは私達がいた大和寮だった。懐かしい前庭の円形の花壇はそのまま残っていた。現在も鉄道の独身寮として使用されているらしい。玄関に数人の中国人女性がいたので李医師の通訳で私が昔ここに住んでいたことを話してみたが、特別の反応はなかった。中に入る許しを得て懐かしの建物に足を踏み入れた。一階西側の廊下を進んで、奥から数えて三つ目が私の住んでいた部屋である。「あった！あった！」と思わず叫んでいた。当時はマホガニー色に光っていたドアは黒ずんで見る影もない。ドアノブに手をやったが施錠されていた。「ああ、懐かしきドアよ、お久し振り！再会出来て本当に嬉しい。」そんな独り言を心の中で呟きながら、振り返ると廊下の窓下には当時と変らないスチームのラジエターが鈍く銀色の光を残しており、懐かしさでいっぱいだった。

しかし、私にはそんな感傷に浸っている時間的余裕はあまりなかった。今回の目的は墓参である。廊下から裏庭越しに兄達を葬った辺りに目をやったが、中国人の家屋や六階建てぐらいのアパートが数棟建ち並び視界を遮っていた。とにかく墓地探しを急がなければならない。方角を定めて車を走らせると幅十数メートルはありそうな大路（青年路という新道）にぶつかった。南から北に伸びる新設の道路だ。この道路の西側一帯が墓地だったと思ったが、そこには店舗や住宅がたくさん建っていた。この情景を目にした私は、残念ながら墓地探しは諦めざるを得なかった。側に佇んでいた老人に、「この辺りに日本人の墓があった筈だが？」と尋ねてみたが、数年前に引っ越して来たばかりなので分からないとのことだった。無理もない、五十数年も前のことだから当然である。近くに鉄道関係の病院（長春客車医院）があり、ここの庭に入れてもらい、建物脇の雑草の繁みを見つけた。一見して埋葬地を思い起こさせる広い場所を墓所に見立て、生花を供え、ローソクを点し線香を焚いて「阿弥陀経」を上げた。亡き人と共に私の声を通して釈尊の説法に接し得たことは有難いことだった。見物好きの中国人達が窓を開け始めたが、李医師が制止して下さった。時間の過ぎるのはあっという間だった。夕暮れが迫ってきたので、李医師の案内で餃子を食べた後、ホテル（長白山ホテル）に戻った。

仙台の古川医師のご尽力で李医師と巡り逢い、そして墓参が出来たことには感謝でいっぱいである。改めて御礼を申し上げる次第である。

帰国して数ヶ月後、本間団長の墓参と報告を兼ね、釧路市へ元開拓団の同僚を訪ねた。再会の嬉しさで時の過ぎるのも忘れるほどだった。

大和寮正面

大和寮廊下より裏庭を眺める

大和寮より裏庭を望む

病院敷地内で読経する

南湖公園　曲亭橋にて

南湖公園で買った絵画

「尊老愛幼図」

ベチューン医大前

左端が李医師、中央が古川弘平医師、後方の像は共産軍に貢献したカナダ人のベチューン医師

建物は（旧）国務院

二. 長春今昔

五十数年振りの満州への旅は長春での墓参が主な目的だったが、懐かしい街の様子を少し紹介してみたい。立派だった新京駅は建替えられて鉄筋コンクリートの近代的な駅舎になり、駅から真っ直ぐ伸びる大同大街はスターリン大街、興安大路は西安大路、児玉公園は勝利公園、吉野町通りは長江路、関東軍司令部の建物は吉林省革命委員会になっていた。司令部の建物にカメラを向けると歩哨に制止された。興安大路の街路樹は切り取られ路面電車のレールも取り払われていた。当時、街角でよく見られたマーチョ（馬車）も今では、バスやタクシーに代わっていたし、時々馬車を引くロバや農民が旧式のオート三輪で荷を運ぶ姿が旅行者の目を引いた。また、脇に荷物を乗せるように作られたサイドカーのような格好をした自転車で長尺物を運ぶ中国人の姿も珍しかった。乗用車はヨーロッパ車と日本車が殆どでアメリカ製はあまり見かけなかった。驚いたのは市民達が交通ルールを守らないことだ。赤信号なのにクモの子を散らしたように横断歩道を渡って行く。万一交通事故死しても補償金は五十万円程度だとバスガイドから聞かされ理解し難かった。宿泊したホテルの前の南湖公園を早朝散策したが市民であふれていた。中国人の青年が近寄って来て日本語を勉強中なので公園内を案内させてくれと言う。無料と言うので一緒に歩いた。園内で京劇の独特な発声練習をしている人物には、人だかりが出来ていた。湖には「曲亭橋」があり、渡ってみたが、見渡す限り中国庭園そのもので、私の趣味ではなかった。帰り際に公園入口の路上で彩色した中国風絵画を売っている婦人がいた。案内人の中国人青年に依ると婦人の夫の作品だと言う。思案していると忽ち見物好きの中

国人達が集まって来た。日本人旅行者の買い物が珍しいのだろう。龍や人物の絵を数枚購入して持ち帰ったが、悠長な中国人の見物には呆れるばかりだった。

因みにハルピンにもスターリンの名前が付いた広場があった。旧ソビエトの「スターリン」様は中国の通りや広場にも名を残すほどに貢献した人物だったのだろうかと考えさせられた。

三．　関東軍と匪賊（ひぞく）

昭和初期頃の日本農業は耕地面積も狭く農家の二、三男に分け与える農地がなくて困っていた。こんな時代に関東軍の参謀石原莞爾（いしはらかんじ）らは中国東北部（満州）に日本から五百万戸の移民計画を立てて、農業の窮状を解決しようと考えていた。

関東軍は中国人が今迄耕作していた土地を強制的にタダ同然の価格で買い上げて中国人を追い払い日本の開拓移民に分け与えたのである。以前から勢力を持っていた反満抗日ゲリラ、即ち匪賊（集団で出没し、強奪、殺人などを犯す盗賊・馬に乗って襲ってくる匪賊を馬賊と称した。）や市民の中にも、この様な土地買収を良しとしない感情があった。関東軍は行動の悪質な匪賊達を抑えるため、都市部では匪賊に通じる人物を密告させる組織を作った。十戸を一単位としてこれを一牌（ひ）と呼び、十牌を以って一甲と言った。これらの甲を管理する一警察署管内を戸と称しこれを「保甲制度」と呼んだ。また、農村部では農家が一戸ずつ散在していると匪賊の隠れ家になり易いため農民達を一個所に集めて集合村落（集落）を作らせた。空家になっ

た家は匪賊達の隠れ家にならないよう全て焼き払った。新たに作った集落には周りに約三メートルの土塀を作り更に外濠を堀り、塀の四隅には監視塔を設けて、常時十名程度の武装警察官を配置し匪賊からの侵入に対処したと言う。この様な集落は一九三二年（昭和七年）頃には既に二千個所を超えるまでになっていた。私達の開拓団が入居した集落には外濠や監視塔こそなかったが出入口が四個所、土塀の高さが二～三メートル、住人は中国人の農民に限られるなど、構造がそっくりだったので、今更ながら驚いている。集落は自己防衛のための中国人の知恵とばかり思っていたが、本当は関東軍の匪賊対策だったことは驚きだ。朝鮮族の家が一軒だけ集落の外に建っていたのは匪賊との繋がりが薄いと判断してのことなのだろうか、大秋馬産開拓団も広い放牧地を買収し、近隣の畑を耕していたから、現地の中国人から歓迎されていなかったと思うが、中国人達は極めて温和で親切だった。ソ連侵攻により私達が避難する際には暴動も起こさず、静かに送り出してくれたことには感謝している。

数年前、満州へ墓参に訪れた時のことは既述の通りだが関東軍と匪賊とのこととなると忘れ得ない場所がある。私は、現場に案内されるまで全く知らなかったことに恥入るばかりである。

平頂山（へいちょうざん）村で関東軍が起こした事件である。昭和七年一月、約千人の匪賊達が撫順（ぶじゅん）炭鉱（遼寧省）の楊柏堡（やんぱいぷ）村で、数人の日本人を殺害したことに事件の発端がある。怒った関東軍は平頂山村とその近村の住民が匪賊達に手を貸したと勝手に判断し報復を企てる。「写真撮影を行うから」と言って崖下に約千名（四百名説もある）の村民を集合させた。関東軍は数台のトラックに幌を掛け、隠し持っていた六丁の機関銃を住民に向けて一勢に掃射した。生き残った者は十数名と言う。前に立っていた人が盾の役目をしたのかも知れない。虫の息の人もいただろう。

関東軍は遺体の上に薪を積みガソリンをかけて焼き、更に崖を爆破して、屍(しかばね)を埋めると言う暴挙をやってのけた。これが有名な平頂山虐殺事件である。

太平洋戦争後、中国はこの事実を永く後世に伝え残そうと屍をそのままの状態で掘り起こして保存し展覧館を建て一般公開している。私は関東軍の暴挙を目のあたりにして、犠牲者の無念さを思い言葉では言い表せない程のショックと怒りを覚えた。これは決して人間のする行為ではない。

平頂山殉難同胞記念碇にて（平成7年）

平頂山殉難同胞遺骨館の内部の様子（出典：小学館）

四．　本間団長に想う

馬産開拓団とは一寸耳馴れない言葉かも知れないが、太平洋戦争末期、馬は日本陸軍の戦力として重要視されていた。軍部は北海道庁に対して、満州で軍馬を増産する計画を持ちかけ「大秋馬産開拓団」構想が出来上がったらしい。開拓団長には今まで色々な要職に就いて活躍して来られた本間寛氏が選ばれることになった。氏は既に還暦を過ぎておられたが、家族の励ましもあって苦渋の決断をされたようだ。

現地では団長として敏腕を振るわれたに相違ないが、少年の私にとっては言葉を交わす機会もなく雲の上の方だった。終戦後、長春に避難中も陰に陽に団員の心の支えとなっておられた。引揚後、私が職を求めて仙台市に来た昭和二十四年頃、政府から引揚者給付金支給の話があった。申請書に引揚者を証明するものが必要と言うので本間団長に証明を依頼した。証明書に添えて「お役に立つことがあれば何でも致しますから、申し出て下さい。」との懇切丁寧なお手紙を頂いた。お陰で給付金を受け取ることが出来たし、また平成になってからも、総理大臣から引揚者への慰労状や銀杯を頂くことが出来た。

元大秋馬産開拓団
団長　故 本間寛氏

思い起こせば齢（よわい）六十を過ぎ、満州の大混乱の中を団長として団員達を束ねて来られた御苦労は並々ならぬものがあったであろう。札幌駅まで辿り着きやっと肩の荷を下ろされた時の心境こそ察して余りある。駅待合室で解散のご挨拶をされた際の声とお姿が懐かしく偲ばれてならない。既に故人となられて久しいがご存命中に氏の人生観をお聞きしたかったが残念ながら果

たせなかった。釧路市で七十九年の生涯を全うされたとお聞きした。心からご冥福をお祈りする。

五.　馬たちよ

草原に馬の群れを見出すとき、思い出すのは満州に放棄された馬産開拓団の馬達である。馬は肩までの丈が十四七センチメートル以下をポニーやロバに分類し、これら以上を一般に馬と呼んでいるようだ。馬は聴力がよく、また賢い動物だ。満州の馬は小型のせいか二頭立にしたマーチョ（馬車）をよく見かけた。農作業を終え、荷馬車に乗った中国の少年達が、「イワッ！イワッ！イッ！チョッ！」と長い竹竿の先に麻縄を結んだ鞭（むち）を振り廻しながら集落へ帰って来るのを見かけたものだ。掛声を珍しがって開拓団の子供達が中国人の馬にけしかけたりしたこともあったが暴（あば）れるようなことはなかった。一方、開拓団が連れて行った馬達は大型の農耕馬だった。一戸当り少なくとも五頭～六頭は飼っていたと思われるから団員が総勢二十軒ぐらいとしても百頭以上の馬が飼育されていたことになる。上あごに舌を打ちつけて「チュッ！チュッ！」と舌を鳴らしながら馬を操る団員達の姿が目に映る。当時は国策として満州の地へ馬を送ってしまったが、一夜にして彼等を異国の地に放棄してしまったことは残念の極みである。事情を知る由もない馬達はその後どうしただろう。馬の寿命は約二十五年と言われるから、当時の馬達はもうこの世にはいないだろうが、可哀想なことをしたものだ。

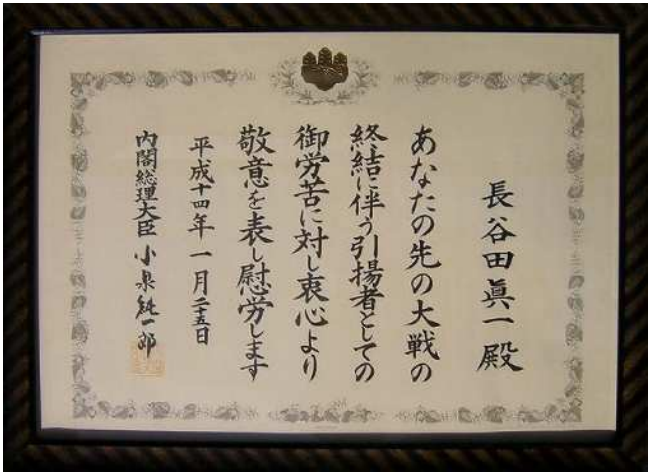
想像の域を出ないが、侵攻して来たソ連軍の戦利品として極寒のシベリヤ送りとなったのではないかと彼等の行く末を憂う。心から馬達に告げたい。

北満の曠野におき去りし
愛馬たちへの情止み難く
ここに排なき一篇の詩を詠みて
惜別の真心(まこと)を捧げん

青毛よ！栗毛よ！黒鹿毛よ！
しばしの出会いをありがとう
にわかの別離　運命にて
許しておくれ　馬達よ
いずれの郷に飼われしか
いずこの土に還れるや

「大秋牧場」に、若葉食む
若き駒らの勇姿こそ
永遠に忘れじ目に胸に
きみらの子らや孫たちも
父母の来し方胸に込め
主に愛でらる名馬なれ

著者



長谷田眞一殿

あなたの先の大戦の
終結に伴う引揚者としての
御労苦に対し衷心より
敬意を表し慰労します

平成十四年一月二十五日

内閣総理大臣 小泉純一郎

政府から授与された慰労状（平成14年）

政府から授与された銀杯
(平成19年)

長谷田眞一 殿

先の大戦における御労苦
に対し心から慰藉の念を
表し特別慰労品を贈呈
します

平成19年11月15日

内閣総理大臣
福田康夫

銀杯授与の書状(平成19年)

あとがき

山高ければ谷深し、私の満州は谷だったかも知れない。谷底で考え、這い上がる力を与えられたとすれば、谷底もまた有難い。

艱難汝を玉にす、というが、玉になり得たかどうかは疑わしい。河を渡り山路を逃げ惑った同胞達の話を聞くと私は未だ幸せな方だったかも知れない。いま書き終えてみて、苦しみの感情を文字で表現することの難しさと、己の文の稚拙さとを痛感する。

柳宗悦氏の法句に、「吉野山ころびてもまた花の中」というのがある。満州での苦難も一つの、「ころび」かも知れないが、何時何処でころんでもそこは光明（注2）の中の出来事であることに気付かせて頂いたことをしあわせに思う。

人は生ある限り宿業（注3）を背負って行かねばならない。苦にして怨まず、楽にして驕らず、すべてを引受けて生きて行きたいものだ。

過ぎ去った苦楽は振返ってみると共に懐かしい。思い出は宝であるといわれるが、同感である。

混乱の中の一年を回顧してみたが未だ不充分な面も多い。小誌を上梓するにあたり助言を頂いた海事研究家佐藤快和氏、校正、編集の労をわずらわせた長男克彦、そして写真を提供して下さったご遺族の方々に心から謝意を表し、文中氏名の使用を快諾下さった吉井みどり氏、小

野澄子氏には心から御礼を申し上げる。また、元開拓団の方々には連絡不能の為、当時のお名前を使わせて頂いたのでご容赦願いたい。

広野の地平線に真っ赤に燃えた巨大な夕陽が沈んで行く様を思い描きながら筆を措くことにする。

平成二十一年　夏

著者

注１：親鸞の弟子、唯円の書

注２：仏・菩薩の智慧と慈悲

注３：過去世における業（ごう）

足跡

昭和19年4月	開拓団先遣隊北海道を出発
昭和20年4月	本隊として、米澤源作、長谷田忠夫、眞一　羽幌を出発
4月	開拓団の一員として眞一、白山丸にて新潟港を出航。北朝鮮を目指す
4月	北朝鮮、清津（チョンジン）港着。鉄道にて満州を目指す
4月	満州国三江省湯原県向陽村へ到着
4月	別船便にて伯父、兄が牛馬と共に到着
8月9日	ソ連軍が北満へ侵攻開始
8月11日	ソ連軍侵攻から免れるため、向陽村から南部へ避難開始
8月12日	綏化（スイカ）市日本軍飛行場へ避難
8月15日	日本終戦
8月22日頃	綏化市を発ち長春へ移動開始
8月23日頃	長春着。満鉄の大和寮にて生活を始める
12月16日	伯父　米澤源作　死去（享年４９歳）
昭和21年4月5日	兄　長谷田忠夫　死去（享年２１歳）
7月	引揚開始、長春駅から南下、コロ島を目指す
7月	コロ島着
7月	コロ島から名優丸にて日本を目指す
8月	佐世保港へ帰港（船中泊一ヶ月）
8月	国鉄佐世保駅から列車にて東京方面へ移動開始
8月	東京、仙台、青森経由で札幌着、開拓団解散
8月	羽幌着

著者近影

自宅庭にて

昭和6年（1931年）北海道苫前郡羽幌町に父幸次郎　母キヨの三男として出生

昭和20年4月　　満州国三江省湯原県向陽村大秋馬産開拓団に参加

昭和21年8月　　コロ島より引揚

昭和35年3月　　東北学院大学　卒業、銀行勤務を経て、現在にいたる

苦難に耐えて　－少年の見た満州開拓団－

平成21年8月15日　初版　第1刷　発行

著　者　長谷田　眞一

〒985-0862

宮城県多賀城市高崎三丁目３－１

TEL022-368-5420

編集・発行者　長谷田克彦

〒154-0024

東京都世田谷区三軒茶屋2-19-12-303

TEL　070-5560-3704

本書籍ご案内のホームページ　http://bmca.jp/kunannitaete